

42112

教科書文庫

4
810.
51-1933.
2000 8-2057

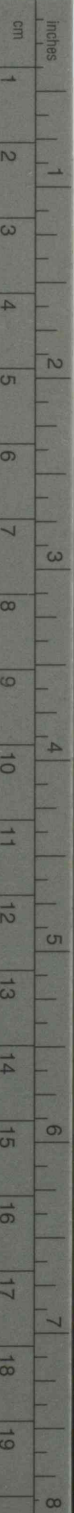
8.8
1933.

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

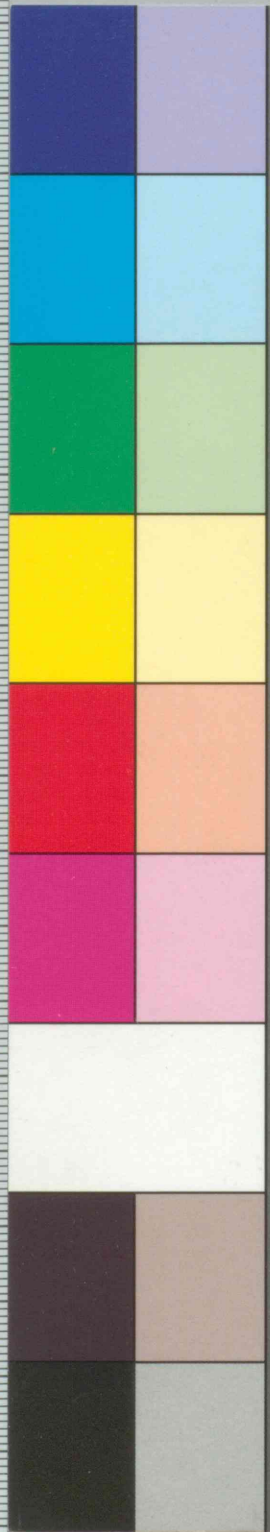
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



5a
810
828

國文學史



資料室

濟定檢省部文

用科語國校學中·校學範師 日六十月一十年八和昭

50
810
B8

文學博士高木武著

國文學史

東京 富山房版

凡例

- 一、本書は、中等學校用國文學史教科書として著したものである。
- 二、本書は、各時代の作品を、それ／＼、歌謠物語、隨筆等に分類し、各作品に就いて、大體、書史的に記述する組織に據つたが、これは、國文學史教科書の組織として、最も適當なものであらうと思ふ。
- 三、本書は、各作品の書史的知識を與へる一方、時代思潮の推移を傳へて、各作品が、いかにこれを反映してゐるかを明らかにし、また、各作品が後世に與へた影響をも記述した。
- 四、本書は、欄外をも十分に活用して、各時代のあらゆる分野の作品を、可及的に記述することに努め、從來の國文學史教科書に輕んぜられてゐた謠物漢文學等をも閑却しなかつた。



五、本書は、各文學が有する特異の形や色に就いて、その發生當時の事情にまで溯つて、明快に記述し、國文學史に對する知識を、徹底的に得しめることを期した。

六、本書は、文例を豊富にして、これを鑑賞せしめることにより、本文の記述の足りない點を補はしめるやうに計つた。

七、本書は、精巧なコロタイプ刷によつて、最も權威ある古寫本・古刊本乃至作者の自筆稿本の面影を示し、本文の理解に資した。

昭和八年夏

著者しるす

國文學史

目次

序	説	一
第一章	大和時代	三
	一 概観	三
	二 神話と傳説	六
	三 祝詞と宣命	一四
	四 歌謠	二〇
	五 漢文學と佛教説話	二七
第二章	平安時代	三三

第三章 鎌倉時代

一 概観 三

二 漢文學 四

三 歌謠 五

四 物語と日記隨筆 六

五 歴史物語と説話文學 七

第四章 室町時代

一 概観 九

二 歌謠 九

三 歴史物語と戦記物語 十

四 擬古物語と説話文學 十一

五 日記紀行と隨筆 十二

第五章 江戸時代

一 概観 一五

二 浮世草子と黄表紙讀本類 一七

三 浄瑠璃と脚本 一八

四 和歌狂歌と謠物 二四

五 俳諧と川柳 二九

六 隨筆 三〇

七 漢文學と吉利支丹文學 三二

二 歌謠 三六

三 歴史物語と戦記物語 三六

四 謠曲狂言と舞の本 三六

五 御伽草子 三六

六 隨筆 三六

七 漢文學と吉利支丹文學 三六

日文學

日本ノ文學

◎ 日文學史

◎ 國文學史の便

◎ 時代史の便

◎ 文化の由來

◎ 國民の進歩の由來

み、文字が發明されると、文學は始めて固定し、その弘布の範圍が横に無限に廣大すると同時に、縦にも無窮に伸長し、かくして、繪畫・彫刻・音樂・舞踊等の諸藝術に比して著しく永續性と普及性に富み、人文發展の要素として、特に偉大な權威をもつものとなつたのである。

文學史は、太古から現代に至るまでの文學の變遷發達の跡を究めるもので、即ち個々の文學作品を知ることにより、その時代を通じて流れてゐる思潮を汲み、更に進んでは、文化の由來や本質を明らかにしようとするものである。故に、我々の祖先の精神生活を知り、我が國固有の文化の由來や本質を明らかにするに就いては、國文學史を究めることが、最も大切であるといはなければならぬ。そして、かくの如き知識は、將來我々の進むべき道に就いて、大きな暗示を與へずにはゐないものであらう。

時代の範圍

大和時代

神武天皇

桓武天皇

御即位

延暦二年七月

(二四四年)

遷都

長岡宮

第一章 大和時代

一 概 觀

人皇第一代神武天皇が皇居を畝傍山の麓、橿原の地に奠め給うてから、第五十代桓武天皇が山城國長岡に遷都されるまで、凡そ一千五百年の間、歴代の皇居は概ね大和國にあつたので、この時代を大和時代といつてゐる。しかし、大和時代には、この文學は、必ずしも大和時代に製作された文學ではない。その以前の時代において製作された文學にして、いまだ文字のなかつたため、口づから傳へてゐたものを、この時代になつて始めて記録したのも、少なくない。故に、大和時代の文學といつても、その時代はずつと溯つて、建國以前、即ち神代の文學をも包括することとな

大和國の自然

「眞秀ろば」は最もすいれた地域をいふ。「たなつく」は重疊してゐるの意。

るわけである。

大和國は上代の帝都の地として、まことにふさはしい國であつた。日本武尊は「大和は國の眞秀ろば、たなつく青垣山、隠れる大和し美し」とお歌ひになつたが、この御歌の通り、東には春日・高圓から三輪・泊瀬の山々、南には多武・高取から吉野の群山、西には金剛葛城から生駒の連嶺が、遠く近く青垣をなして、この國を圍んでゐる。そして、中央の平野は坦々として廣く、明るい日の光は隅々まであまねく照りとほり、地味豊かに、氣候は極めて溫和である。自然の美を心から愛し、どこまでも快濶で、明るさを好んだ我が上代人は、この理想郷に、皇室を中心として、氏族制度による鞏固な團結をなしつゝ、平和な楽しい生活を營んでゐたのであつた。

百濟から漢文學が傳へられたのは應神天皇の朝で、それ以前

時代の特色と文學の傾向

は、我が國には文字はなかつた。何事も口づから言ひつぎ語り傳へるばかりであつた。しかし、この間にあつても、昂揚した感情を旋律的にあらはした歌謠、民族思想や宗教的觀念等によつて生み出された神話傳説、或は祝詞の如きものが既に發生してをり、殆ど外國文學の影響を受けることのなかつたこれ等の原始文學は、我が國民の純粹の性情を最も赤裸々にあらはして、それが即興的であればあるほど、本來の國民性を窺ひ得る點において、貴い價値を有してゐるのである。この傳誦されて來た文學は、漢文學が傳來して後、漢字によつて記録されたのであるが、その文獻の現存してゐるものも「古事記」「日本書紀」をはじめ可なりある。漢文學の傳來よりやゝおくれて、欽明天皇の朝には佛教がもたらされ、次いで大陸との交通が正式に開かれるに及んで、我が文運の進展は急に著しくなり、國民の自覺心は大いに喚起され、か

古事記と日本書紀

「古事記」には天地開闢から推古天皇に至るまでの事が記されてゐる。

「日本書紀」には天地開闢から持統天皇に至るまでの事が記されてゐる。

くして「咲く花のほふが如き」奈良朝の盛代を現出するに至つた。

二 神話と傳説

傳説時代の文學である神話傳説は、これを「古事記」「日本書紀」及び「風土記」の中に見出だすことが出来る。

「古事記」三卷は、前に天武天皇が稗田阿禮をして、皇室の御系譜や皇位繼承の次第、また皇室をはじめ諸氏族が傳承した神話傳説等を誦み習はしめ給うたが、いまだ成書とはなつてゐなかつたのを、奈良朝に入つて、和銅四年、元明天皇が太安萬侶に命じて、阿禮の誦み習つた事柄を筆録せしめられ、翌五年成つて上つたものである。また「日本書紀」三十卷は、「古事記」よりやゝおくれて、元正天皇の養老四年に、天武天皇の皇子舍人親王太安萬侶等多く

古事記 漢文併用

神話傳説が多い有り休 二 隋の漢書

日本書紀

漢文 正史を基にして 修飾を加へて 有休あり

神話

神話中心の物語 日本國民性が現れてる

祖先崇拝 神明の神話 清浄な神話

神話のイデオロギ

の學者が、勅命によつて撰修したもので、「古事記」と共に、現存する最古の文獻として貴ばれてゐる。たゞ「古事記」が古語古意を可及的に保存しようとして、國文を主とし、漢文の構造を併用した折衷體の記述法をとつてゐるのに對し、「日本書紀」は、支那の史籍に倣ひ、歌謠の外は殆ど純粹の漢文で書かれてゐるところに二書の相違があり、なほ「日本書紀」はその書名を見ても明らかであるやうに、支那に對して、我が國の尊嚴なる所以を知らしめようとして編纂された官撰史であるから、傳説的要素よりも史傳的要素の方が多く、文章は莊重瑰麗を極めてゐるが、文學的價值においては「古事記」に劣つてゐる。

神話は、原始時代の民族が、天地間のあらゆる現象に對して驚異し、その民族に共通した驚異の感から、人間以上の絶大な力をもつ神の存在を認め、これによつて自然人事の諸現象を説明し

た一種の物語であつて、約言すれば、神を對象とする民族固有の
説話といふことが出来よう。今「古事記」及び「日本書紀」に記された
神話を見ると、天地開闢から萬物生成、國土經營、國家成立に至る
までのことが詳しく物語られてゐるが、その中には、我が美しい
國體や、健全な國民性の淵源が明らかにあらはれてゐるのであ
る。即ち伊弉諾尊、伊弉册尊は、まづ大八洲國及び山川草木等を生
み給うた後、天照大御神、月讀尊、素戔嗚尊の三柱の貴い御子を舉
げ給うたが、中にも天照大御神は日の神にましまして、一に大日
靈貴尊と稱し奉り、光華明彩、六合の内を照徹し給うたので、諾册
二尊は大神をして高天原を治めしめられたといふ神話には、我
が國土が皇祖神と御兄弟であることが明示されてあり、これに
より我が國家と皇室との離れることの出来ない關係が、おのづ
からにして知られる。また、素戔嗚尊の大蛇退治の神話には、智勇

傳説
在や土地ヲ中心トシテ
國民性ヲ現ハシテ居ル
進取的
樂天的
海軍の事ハ少シハアル
海軍の事ハ少シハアル

記紀の傳説

にすぐれた國民性が示され、大國主命が國土を潔く天孫に獻ぜ
られた神話には、大義名分の道理をよく辨へた國民精神が示さ
れてゐる。その他、祖先崇拜の美風も、活動的、發展的な生活態度も、
清淨潔白を愛する性情も、すべてこれを神話の中に見ることが
出来るのであつて、純真明朗な祖先の精神生活をまぎ／＼と傳
へて、餘すところがない。

神話は神を對象とする説話であるが、傳説は人生を對象とす
る説話で、歴史時代に入つてから後に發生したものである。しか
し、傳説のうち時代の早いものは、殆ど神話と區別はなく、たゞそ
れが民族固有のものでなく、非常に強い傳播性をもつてゐるこ
とと、必ず英雄または土地に附屬してゐることによつて、纔か
に二者が區別されるに過ぎない。「古事記」「日本書紀」では、神武天皇
の建國創業から以後の記事が、即ちそれであつて、現人神であら

せられる天皇を中心として物語られてゐる傳説には、建設的進取的な興國の氣分が、はち切れるほどに漲つてゐる。長髓彦御討伐に當つて、金色の靈鵄が、神武天皇の御弓弭にとまつた物語、田道間守が垂仁天皇の勅を受けて、常世國に赴き非時の香菓をもたらした物語、日本武尊が薨後、白鳥となつて天翔り給うた物語など、いづれも明るく輝かしい内容をもつた傳説ならぬはない。

ここに天照大御神、あやしとおもほして天石屋戸を細めに開きて、内より告りたまへるは、「吾が隠りますによりて、天原おのづから闇く、また葦原の中つ國も皆闇からんとおもふを、何とかも天宇受賣はあそびし、また八百萬の神もろくく咲ふぞ。」とのりたまひき。すなはち天宇受賣、汝が命にまさりて貴き神いませすが故に、よろこびゑらく、「たまをしき。かくまをす間に、天兒屋命布刀玉命、かの鏡をさし出でて、天照大御神に示せ奉る時に、天照大御神いよ、奇しと思ほして、や、戸より出でて臨みます時に、かの隠り立てる天手力男神、その御手を取りて

「あそび」は歌舞音楽をいふ。

「ゑらく」は愉快に笑ふこと。

「かの鏡」は八咫鏡。

引出だしまつりき。

（於是天照大御神、以爲恠、細開天石屋戸而、内告者、因吾隱坐而、以爲天原自闇、亦葦原中國皆闇矣、何由以天宇受賣者爲樂、亦八百萬神諸咲、爾天宇受賣、自言益汝命而貴神坐故、歡喜咲樂。如此言之間、天兒屋命布刀玉命、指出其鏡、示奉天照大御神之時、天照大御神逾思奇而、稍自戸出而臨坐之時、其所隱立之天手力男神、取其御手引出。）

（古事記神代卷）

故、天照大神すなはち天津彦彦火瓊々杵尊に八坂瓊曲玉及び八咫鏡、草薙劍三種の寶物を賜ふ。また中臣の上祖天兒屋命、忌部の上祖太玉命、猿女の上祖天鈿女命、鏡作の上祖石凝姥命、玉作の上祖玉屋命、すべて五部の神たちをもつて、そへ侍らしむ。よりに皇孫に勅してのたまはく、「葦原の千五百秋の瑞穂國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて治せ。行矣。寶祚の隆えまさんこと、まささに天壤と窮りなかるべし。」

（故、天照大神乃賜天津彦彦火瓊々杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三

「とものを」は部屬の長の意。

「さきく」は無事にの意。

種寶物。又以中臣上祖天兒屋命、忌部上祖太玉命、猿女上祖天鈿女命、鏡作上祖石凝姥命、玉作上祖玉屋命、凡五部神使配侍焉。因勅皇孫曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆當與天壤無窮者矣。

(日本書紀神代卷)

風土記

「古事記」「日本書紀」の外に、上代の傳説を結集した文獻として現存する「風土記」は、和銅六年、即ち「古事記」が撰進された翌年に、元明天皇が畿内・七道諸國に詔して、その國々の地誌を編ましめられ、諸國で成るに隨つて獻つたもので、今は僅かに出雲・常陸・播磨・肥前・豊後の五箇國のもののみが存し、別に山城・大和・攝津以下三十餘箇國の各逸文が遺つてゐる。いはば、當時の郷土誌で、その所收の傳説は、悉く民間で行はれてゐた斷片的なものであり、それが地理に隨つて排列されてゐるところに、記紀に見える傳説とは、おのづから別趣の興味がある。説話の内容は、大部分、地名起原の

「郡家」は郡司の役所

説明をなしてをり、すべて牧歌的な郷土の句を豊かに漂はせてゐる。文體は概ね漢文であるが、中には「出雲風土記」の如く、國文脈を多分に含んでゐるものもある。

高麻山は郡家の正北一十里二百歩、高さ一百丈、周五里、北の方に檜椿等の類あり、東南西三方みな野なり。古老の傳へにいふ、神須佐能袁命の御子、青幡佐草彦命、この山の上に麻蒔きそめたまひき。故高麻山といふ。即ちこの山峰に坐すは、その御魂なり。

(高麻山、郡家正北一十里二百歩、高一丈、周五里、北方有檜椿等類、東南西三方並野。古老傳云、神須佐能袁命御子、青幡佐草彦命、是山上麻蒔初故、云高麻山。即此山峰坐、其御魂也。)

(出雲風土記大原郡)

三 祝詞と宣命

我が國は「言靈の幸ふ國」といはれ、また「言靈のたすくる國」とも

祝詞

祝詞

神事申言書
散文アノハ調子ヲ整テ
アケテ明ニイハレカ
祭ハ早クテ其ノ儀
聖旨ヲ大ニ敬テ其ノ
大ニ其ノ見ル

いはれた。これは、言葉に神秘的な靈力が宿つてゐて、その作用により、めでたい言葉を唱へれば、吉事を招くことが出来、不吉な言葉を唱へれば、凶事を招くことが出来るといふ上代人の信仰から發したもので、我が國は言葉のよい靈の作用が特に著しい國であるとの意味に外ならない。かくの如き言葉の神秘力に對する上代人の信仰は、いはゆる祭政一致の思想から次第に祭祀が發達して來るにつれて、遂に一つの文學を生んだ。それが即ち祝詞である。祝詞は神に白す言葉であるが、言靈信仰に發してゐるものであるから、その内容は、或は神徳をほめ、或は幣帛をたゞへるなど、神意を悦ばしめる稱辭に満たされてゐる。そして、現實生活から罪穢及び災を祓ひ、國家の繁榮と民族の幸福とを願ふのが、その思想の主流をなしてをり、特に農事に關するものの多いのは、我が國が農業をもつて立國の大本として來たことを語つ

てゐるといへよう。

祝詞の現存するものは、平安時代の初期、醍醐天皇の延長五年に藤原忠平等が撰進した「延喜式」に收められた二十六篇と、同時代の末期に藤原頼長が手記した「台記」の別記に載せられた一篇とがあるのみで、それもすべてが上代のものではなく、中には平安時代に入つて製作されたものもあるのである。その作者はもとより明らかでないけれども、當時世襲的に朝廷の祭祀に奉仕してゐた中臣・齋部の二氏が主として製作に當つたものであるらしい。これを組織の上から見ると、大體において、祭祀の由來等を語る叙事的の部分と、祈願の旨を述べる抒情的の部分とに分れてゐて、修辭には、祝詞の本質上、上代人のなし得る最大限の技巧が凝らされ、對語や對句を盛んに用ひてあるのみならず、語句を反復重疊して、雄渾莊重な格調を添へ、森嚴崇高の氣を横溢せ

「延喜式」は朝
延年中の儀式
百官臨時の儀
法五年に初め
喜平が勅撰に
時平が勅撰に
當つたのであ
坊の筆にまだ
忠平が筆にだ
業を繼がその
途に成つたの
である。別記長
の「台記」は頼
長が別記に記
録した儀式に
關するもの。

しめてゐる。

「いつ」は尊嚴の意。

「いほり」はぼんやりとして明らかでないこと。

「大津邊」は立派な港。

「燒鎌」は火で鎌を鍛へたこと。

「さくなだり」は水が山から非常な勢で流れ落ちるさまをいふ。

「かゝ呑む」はがぶくんと呑むこと。
「氣吹戸」は罪人を黄泉國に氣吹き放つ所をいふ。

かく宣らば、天つ神は天の磐門を押披きて、天の八重雲を、いつの千別きに千別きて聞しめさん。國つ神は高山の末、短山の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほりをかき別けて聞しめさん。かく聞しめしてば、皇御孫之命の朝廷を始めて、天の下四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹放つことの如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹掃ふことの如く、大津邊に居る大船を、舳解放ち、舳解放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もちて打掃ふことの如く、遺る罪はあらじと、祓へ給ひ清め給ふことを、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬にます瀬織津姫といふ神、大海原に持出でなん。かく持出で往なば、荒鹽の鹽の八百道の、八鹽道の鹽の八百會にます速開都姫といふ神、持ちかか呑みてん。かくかゝ呑みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國底の國に氣吹き放ちてん。かく氣吹き放ちてば、根の國底の國にま

す速佐須良姫といふ神、持ちさすらひ失ひてん。

(如此久乃良波、天津神波、天磐門乎押披、天之八重雲乎、伊頭乃千別爾、千別氏所聞食武、國津神波、高山之末、短山之末、爾上坐、高山之伊穗理、短山之伊穗理乎、撥別氏所聞食武、如此所聞食武、皇御孫之命乃朝廷乎、始氏、天下四方國、罪止云、布罪波不在止、科戸之風乃天之八重雲乎、吹放事之如久、朝之御霧、夕之御霧乎、朝風夕風乃吹掃事之如久、大津邊、爾居大船乎、舳解放、舳解放、放、大海原、爾押放事之如久、彼方之繁木本乎、燒鎌乃敏鎌、以氏打掃事之如久、遺罪波不在止、祓給比、清給事乎、高山之末、短山之末、與、佐久那太理、爾落多支都、速川能瀬、坐須瀬織津比咩止云、神、大海原、爾持出武、如此持出往、波、荒鹽之鹽乃八百道、乃八鹽道之鹽乃八百會、爾坐須速開都、比咩止云、神、持可々呑、如此久可々呑、氣吹戸坐須氣吹戸主止云、神、根國底之國、爾氣吹放、如此久氣吹放、波、根國底之國、爾坐須速佐須良比咩、登云、神、持佐須良比失、此。

大祓は毎年六月と十二月と各晦に朱雀門で行はれた。

宣命

祝詞は神に白す言葉であるが、宣命は天皇が臣民に宣り給ふ

(大祓の一節)

宣命

天皇の臣民に宣り給ふ御言葉のあり
「續日本紀」は文武天皇から
「御世」は聖武天皇に
「御代」は聖武天皇に
「御宇」は聖武天皇に
「御歳」は聖武天皇に
「御年」は聖武天皇に
「御月」は聖武天皇に
「御日」は聖武天皇に
「御時」は聖武天皇に
「御刻」は聖武天皇に
「御辰」は聖武天皇に
「御刻」は聖武天皇に
「御辰」は聖武天皇に
「御刻」は聖武天皇に
「御辰」は聖武天皇に

御言葉である。しかし、天皇が臣民に宣り給ふ御言葉でも、漢文で書かれたものは、これを詔勅といひ、國語で書かれたもののみを宣命といふのであつて、「續日本紀」に收められた文武天皇即位の宣命以下六十二篇が現存してゐる。この宣命は、皇室または國家に重大事ある場合、我が國家の統治者としての御意志を臣民に宣布されるものであるから、文辭の莊重なこと、形式の整齊してゐることは、祝詞と變りないが、その内容に至つては、祝詞よりも遙かに理智的な分子が多く、複雑でもある。そして、その中に、畏くも臣民を大御實とみそなはし、赤子といつくしみ給ふ大御心の程を窺ひ奉ることが出来るのである。なほ、宣命には、佛教や儒教等の外來思想が少からず取入れられてゐるが、これは時勢に伴ふ當然の結果といはなければならぬ。

故、ここをもて、親王たちを始めて、王たち、臣たち、百官の人たちの、淨き

「あな、ひ奉る」は下の「輔佐」である。

「辭立つ」は常と變つたことをする意。「弱兒」はをさな子をいふ。「治す」は育てること。

宣命や祝詞の如き表記法を宣命書といふ。

明き心をもちて、彌務めに彌結りにあな、ひ奉り、輔佐け奉らんことに依りてし、この食國天の下の政事は、平けく長くあらんとおもほします。また天地の共、長く遠く改るまじき常の典と立て賜へる食國の法も、傾くことなく、動くことなく、渡りゆかんとおもほしめさくと詔りたまふ命を、衆聞しめさへと宣る。遠皇祖の御世を始めて、天皇が御世々々、天つ日嗣と高御座にまして、この食國天の下を、撫で賜ひ、慈み賜ふことは、辭立つにあらず、人の祖のものが、弱兒を養ひ治すことの如く、治め賜ひ、慈み賜ひ來る業となも、神ながらおもほしめす。ここをもて、まづ、天の下の公民の上を慈み賜はくと詔りたまふ天皇が大命を、衆聞しめさへと宣る。

故、是以、親王始而、王臣、百官人等乃、淨明心以而、彌務爾彌結爾、阿奈々、比奉、輔佐奉、事爾依而志、此食國天下之政事者、平長將在、止奈母、所念坐。又天地之共、長遠不改常典、止立賜、爾留、食國法母、傾事無久、動事无久、渡將去、止奈母、所念行、左久止、詔命、衆聞宣、遠皇祖御世乎、始而、天皇御世御

世、天豆日嗣止高御座爾坐而此食國天下乎、撫賜比、慈賜事者、辭立不在、人祖乃意能賀弱兒乎、養治事乃如久、治賜比、慈賜來業止奈母、隨神所念行須。是以、先豆先豆天下公民之上乎、慈賜久止、詔天皇大命乎、衆聞食止詔。

(元明天皇即位の宣命の一節)

四歌 謠

傳誦時代の歌謠も、やはりこれを「古事記」及び「日本書紀」の中に見ることが出来る。この二書の外にも「風土記」等に少しは見られるけれども、記紀に收められたものは、二書重複したものを除いても、なほ二百首の多きに上り、當時の代表的な歌謠は、ほゞこれに盡きてゐるといつてよい。一體、傳誦時代の歌謠は、民族の共通的な生活感情を赤裸々に表現したもので、個性の文學ではなく、民衆の文學であつた。また、文字に書いて眼で見る後世の歌と異

記紀の歌謠

なり、昂揚し切迫した感情を口づから吟誦した歌であるだけに、内容は光明的で、調は輕快に、題材は主として現實生活から取られて、叙景・詠物の作は極めて乏しい。即ち戰勝の愉悅、酒宴の快味等が天真爛漫に詠はれてゐるものが、當時の歌の大部分を占めてゐるのである。かくの如く單純な詠歎がそのまゝ、歌になつたものであるから、形式の一定してゐないのは、もとより當然のことであるけれども、短音の句と長音の句とを交錯せしめて律格を形づくつてをり、素樸ながら疊語・對句・譬喩・枕詞等も用ひてあつて、後に發達すべき歌謠の形式・修辭の萌芽を、ここに認めることが出来る。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を
(夜久毛多都 伊豆毛夜幣賀岐 都麻碁微爾 夜幣賀岐都久流 曾能夜幣賀岐袁)

(素戔鳴尊—古事記)

「妻籠みに」は妻のすまかとして意

昂揚し多感情ヲ具候
味レテ法則ニ泥ス不致ス
カ目由ナリ
形を整フ事ハ漢文書傳來
後語句語調ニ主夫ヲ擬
テテテ夫ハ主依テ思ハ
内聲ハ單純ナリ
八重垣ニテ身ノ流物トシテ
口ト祝賀詞等用事ナリ

天皇が忍坂の
大室屋におひ
て八建土蜘蛛
久米部を賜ひ
て撃たしめら
れた時の御歌
久米部等が八
十建を撃滅ほ
した後、戦勝
を祝つて歌つ
た歌
掌酒活日が
神天皇に神崇
歌を獻つた時
の酒

萬葉集

忍坂の 大室屋に 人多に 來入り居り 人多に 入り居りとも
みつゝし 久米の子が 頭槌 石槌持ち 撃ちてし止まん み
つみつし 久米の子らが 頭槌 石槌持ち 今撃たば良らし
今はや 今はや あゝ しやを 今だにも 我子よ 今だにも
我子よ
この御酒は 我が御酒ならず 大和なす 大物主の 醸みし御酒
幾久 幾久 (久米部等の歌―日本書紀)
(掌酒活日―日本書紀)

長歌は普通、
五位七音を
幾つか重ね
て、七音の
とめ七音の
音七音の五
旋頭歌は五
七五七の音
句三十七音
七五七の音
ら成るもの
戲訓はたと
ば「三五月
」
「山上復有山
」
の如きもの
「萬葉集」の表
記法の如く
漢字の音を借
りて國語を
あらはす時
の漢字といふ
假名といふ

書いて眼で讀む歌が派生し、次第に個性のあらはれが顯著となり、遂に歌が一般民衆から離れ、一部上流知識階級の占有物となつてゆく過渡期に當つてゐたのであつた。萬葉集の撰者及び成立の時代に就いては明らかでないが、恐らく幾人かの手により、數次にわたつて編纂し繼がれて成つたものであらう。收められた歌謡は、仁徳天皇の御代の作から淳仁天皇の御代の作に至るまで、長歌、短歌、旋頭歌、合はせて四千五百餘首、これが二十卷のうち、大部分、雑歌、相聞、譬喻歌、挽歌等に分類して排列してある。その詩形は大抵五音と七音とを基調とするものに整齊され、五七五七七の五句三十一音から成る短歌が最も多いが、その表記法は、漢字の音訓を借りる外、機智を弄して戲訓を用ひるなど、巧妙を極めてゐる。そして、作者は、上は天皇から、下は防人、役民、農民、乞食者に至るまで、あらゆる階級の人々を網羅してゐるので、その

當時の金石文は法隆寺の金堂に安置された樂師如來の光徹の背像に見える造像記等である

懷風藻

「懷風藻」は孝謙天皇の天平勝寶三年の撰者であるが、撰者は詳かでない

を大いに刺激すると、これに伴なひ、漢文學も非常な勢をもつて普及するに至つた。しかし、當時の我が國民の手に成つた漢文學は、悉く佚して、その傳來後數百年を経た推古天皇の朝の金石文や、聖德太子が御筆作になつた憲法十七條などが、現存する最古の漢文學である。

降つて、大化の改新以後に至つては、貴族階級の間に漢詩の流行を來し、天智天皇の御子大友皇子、即ち後の弘文天皇、天武天皇の御子大津皇子をはじめ、多くの詩人が輩出したが、次いで奈良朝に入ると、我が國における最初の漢詩集「懷風藻」が出てた。「懷風藻」には、大友・大津兩皇子の御作はもとより、藤原宇合・石上乙麻呂等多くの詩人の作が收められ、「萬葉集」と同時代のものであるから、「萬葉集」の歌人にしてこの集の詩人である者も少くない。隨つて、漢詩における取材の様式や、題詠の風などが、和歌の詠出上に

及ぼした影響の深さに就いては、思半ばに過ぎるものがあらう。

題は「侍宴」「三才」は天地人をいふ

皇明日月と光り 帝德天地に載つ 三才並びに泰昌 萬國臣義を表す

日本靈異記 詳しくは「日本國現報善惡靈異記」といふ

(皇明光日月 帝德載天地 三才並泰昌 萬國表臣義) 天友皇子

また、佛教が盛んになるにつれて、佛教關係の說話も多く行はれたが、それ等を集めて漢文で記したものに、「日本靈異記」三卷がある。この書は嵯峨天皇の弘仁年間、大和の藥師寺の僧景戒が撰録したものであるけれども、收められた說話は、大部分奈良朝に成立したもので、各說話には、佛説にはゆる因果應報の道理が寓されてをり、例外として、小子部栖輕が雄略天皇の勅を奉じて雷を捕へたといふやうな奇譚も一二見えてゐる。とにかく、この「日本靈異記」は、我が國の說話文學の始祖で、後世の說話文學に多大の影響を及ぼしてゐるものである。

平安朝文學の隆盛、原因

一、太平

二、假名、発明

三、風景、美

平安朝時代、特色

一、貴族、文化

二、優美、地、景

三、女性、文化、中心

平安京の自然

第三章 平安時代

一 概 観

桓武天皇の山城遷都以後、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまで凡そ四百年間を、平安時代といつてゐる。この時代は王朝の盛時で、平安京を中心として新に榮えた文化の花は、極盛の機運に際會し、絢爛豪華の美觀を呈したが、その盛運をもたらし、その恩澤に浴したものは、たゞ藤原氏を代表とする貴族階級のみで、一般民衆は殆ど時潮の浸染圏外に置かれてゐた。

青垣山に圍まれてゐるとはいふものの、平野の坦々と遠く開けた大和國に比すれば、平安京の地勢は遙かに變化に富んでゐる。優美な曲線を描く東山三十六峰の背後には、比叡が眉に迫つ

一 概 観

(本田前) 子 草 枕

(切野高) 集歌和今古

(本葉千) 鏡 大

(本田地) 語物氏源

二 漢文學

平安時代の初期には、奈良朝に隆盛の機運に向かつてゐた漢文學がいよいよ極盛期に入り、支那の詩文集「文選」「白氏文集」「蒙求」や小説「遊仙窟」等が愛讀され、その刺激を受けて、漢詩・漢文に堪能な作者が輩出した。随つて、詩文集も續々と出たが、その代表的なものは、嵯峨天皇の勅を受けて、小野岑守が撰進した「凌雲集」、藤原冬嗣等が撰進した「文華秀麗集」、また、淳和天皇の勅を受けて、良岑安世等が撰進した「經國集」等で、一家の集には、僧空海の「性靈集」、菅原道眞の「菅家文章」「菅家後集」等がある。特に「菅家後集」は、道眞が晩年、筑紫の配所に在つて、悲痛な境涯を詠じた詩を収め、哀感の切々と人の心を打つものが多い。この空海・道眞の外にも、小野篁・都良香・大江朝綱等は、當時のすぐれた詩人であつた。なほ、この時

詩文集

「文選」は梁の昭明太子が漢魏六朝間の詩文集をまとめたもの。「白氏文集」は白居易の詩文集。「蒙求」は李瀚が撰じた詩人伝。「凌雲集」は藤原冬嗣が撰じた詩文集。「文華秀麗集」は淳和天皇の勅を受けて、小野岑守が撰じた詩文集。「經國集」は良岑安世等が撰じた詩文集。「菅家文章」「菅家後集」は菅原道眞の詩文集。

中期(百年間)

漢文階級時代

嵯峨、落涙、萬事皆夢

空海、性靈集

小野篁、都良香

二期

漢文階級、和歌が勃興

勅撰集、万葉集、新古今和歌集

特色、技巧、長短、和歌

和歌、万葉集、新古今和歌集

紀實、和歌集、万葉集

後撰和歌集、和歌集

和歌集、万葉集、新古今和歌集

和歌集、万葉集、新古今和歌集

和歌集、万葉集、新古今和歌集

和歌集、万葉集、新古今和歌集

和歌集、万葉集、新古今和歌集

和歌集、万葉集、新古今和歌集

官撰史

代の中期以後に出来た詩文集には、藤原明衡の撰した「本朝文粹」、紀齊名の撰といはれる「扶桑集」等があり、傑出した詩人には、大江匡衡・大江以言・慶滋・保胤等があつた。

閑林獨り坐す草堂の曉 三寶の聲一鳥に聞く 一鳥聲あり人心あり 聲心雲水俱に了々

(閑林獨坐草堂曉 三寶之聲聞一鳥 一鳥有聲人有心 聲心雲水俱了々) (性靈集)

家を離れて三四月 落涙百千行 萬事皆夢の如し 時々彼蒼を仰ぐ

(離家三四月 落涙百千行 萬事皆如夢 時々仰彼蒼) (菅家後集)

「日本書紀」の後を承けて、桓武天皇の延暦十六年には、「續日本紀」が官撰されたが、その後、引續いて、「日本後紀」「續日本後紀」「文德實錄」「三代實錄」等の漢文で書かれた官撰史が出て、かくして、文武天皇

「古今集」に收められた比較的古い時代の歌の作者で有名なのは、紀貫之がその序に「近き世にその名聞えたる人」として挙げた、いはゆる六歌仙、即ち僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大友黒主の六人で、就中、業平は奔放自在な情熱を率直に歌つて、當時第一の巨匠の名が高く、これに次ぐ小町と遍昭とは、前者は繊柔な情緒をもつて、後者は輕妙な着想をもつて、いづれもすぐれてゐる。次に撰者の中では、何といつても貫之が第一人者で、この集の風調を代表し、撰集の際も中心になつてこれに當つたものらしく、その歌は、洗煉に洗煉を重ねたもので、聲調の美において、及ぶものはないが、あまりに整ひ過ぎて、却つて印象が稀薄になり、興趣もまた乏しくなつてゐる。これに對し、躬恆は才氣縱横、即興歌に秀で、技巧はもとより貫之に及ばないけれども、歌に生彩のある點では、貫之を凌ぐものがある。また、友則の歌に

は、典雅な風韻があり、忠岑の歌には、滴るばかりの情趣が感ぜられる。なほ、小町以後の女流歌人では伊勢がすぐれてゐた。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして

(在原業平)

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける

(小野小町)

里は荒れて人は舊りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる

(僧正遍昭)

川風の涼しくもあるか打寄する浪と共にや秋は立つらん

(紀貫之)

憂きことを思ひ連ねて雁がねの鳴きこそ渡れ秋の夜な

(凡河内躬恆)

君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

(紀友則)

後撰和歌集と拾遺和歌集

「古今集」「後撰集」を合はせて三代集といふ

白雪の降りて積れる山里に住む人さへや思ひ消ゆらん

(壬生忠岑)

早月來ば鳴きも舊りなんほとゝぎすまだしきほどの聲を聞かばや

(伊勢)

「古今集」の撰定によつて端緒が開かれてから、和歌の勅撰集が續出するやうになつたが、「古今集」に次いで撰せられたのは「後撰集」で、村上天皇の天曆五年に成り、更にそれに引續き、一條天皇の朝に至つては「拾遺集」が撰せられた。しかし、その歌風は、二集共に「古今集」の型をそのまま踏襲し、いはば「古今集」の延長で、清新の氣は殆どこれを求めることが出来ない。當時の歌壇の代表的の作者には、「後撰集」時代に源順・大中臣能宣・清原元輔等があり、「拾遺集」時代に藤原公任・曾禰好忠・能因法師和泉式部・赤染衛門等があつたが、特に女流の和泉式部は、熱烈奔放な感情を歌に盛りこみ、殉

情詩人の面目を躍如たらしめてゐる。但し、これ等の歌人の作は、前代尊重の保守的傾向により、この二集の中にはあまり收められてゐないで、むしろ「後拾遺集」以後の撰集に多く收められてゐるのである。

老いぬれば同じ言こそせられけれ君は千代ませ君は千代ませ

(源順)

曉の寢覺の千鳥誰がためか佐保の川原にをちかへり鳴く

(大中臣能宣)

春霞立ちな隔てそ花盛り見てだに飽かぬ山の櫻を

(清原元輔)

春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ

(藤原公任)

招くとて立ちもとまらぬ秋ゆゑにあはれ片寄る花薄かな

(曾禰好忠)

順・能宣・元輔・公任・好忠の歌は「拾遺集」から、能因・和泉式部・赤染衛門の歌は「後拾遺集」から採つた。

心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春のけしきを

(能因法師)

春霞立つやおそきと山川の岩間をくぐる音聞ゆなり

(和泉式部)

今夜こそ世にある人はゆかしけれいづこもかくや月を見るらん

(赤染衛門)

三代集以後の勅撰和歌集
〔後拾遺集〕は白河天皇の應徳三年の撰、〔金葉集〕は崇徳天皇の撰、〔詞花集〕は仁平二年の撰、〔千載集〕は後鳥羽天皇の撰、〔源朝野群載集〕は治承四年の撰である

三代集以後、この時代の末期までには、更に〔後拾遺集〕金葉集〔詞花集〕千載集の四勅撰和歌集が出た。そして、〔後拾遺集〕の時代において既に幽寂な叙景の歌が多くなり、歌風更新の機運が漸く萌して来てゐたが、〔金葉集〕〔詞花集〕の二集の時代、即ち源經信、その子俊賴等が歌壇に活躍した時代を経て、千載集の時代に至ると、いよいよ更新實現の域に入り、藤原俊成が出て、新舊の和歌の長短を取捨し、内容形式共に幽玄正雅にして清新味ある一體を完成

經信の歌は「金葉集」から「詞花集」の歌から「千載集」の歌から「山家集」から採った。

した。この俊成の主張した和歌の風體は、幽玄體といはれるものであるが、これは、従來の優美典雅な情趣に加へて、佛教の無常觀に立脚する幽玄な心境を要求するもので、この主張のため、當時の歌の内容は著しく深みを増して來た。千載集時代のすぐれた歌人には、また、自然を友として東西に吟行した西行法師があり、その家集である〔山家集〕には、自然の中に浸りきつたこの天成の詩人の心境が、高雅な氣品を湛へてあらはれてゐる。

夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまろやかに秋風ぞ吹く

(源經信)

はく人もなき古里の庭のおもは花散りてこそ見るべかりけれ

(源俊賴)

住みわびて身を隠すべき山里にあまり隈なき夜半の月かな

(藤原俊成)

歌合と歌論

歌論の初は紀貫之の筆に成る「古今集」の序とすべきであらう。また歌合にも用ひる歌論と見られる

神樂歌と催馬

さびしさは秋見し空にかはりけり枯野を照らす有明の月
（西行法師）
和歌が大いに流行するにつれて、歌合が發達し、歌論が勃興して來たことも、この時代の著しい現象である。歌合はその起原は詳かでないが、夙く文徳天皇の頃から行はれたらしく、宇多・醍醐兩天皇の朝には最も頻繁に行はれた。そして、この歌合の發達は、支那の詩論の刺激と相俟つて、自然に歌論の勃興を促し、これに關する著書も、藤原公任の「新撰髓腦」をはじめ、おびたしく出て、歌道の進運に貢獻した。しかし、その一面においては、和歌の本義を忘れて、徒に枝葉に走り、牽強附會の説をなす如き弊に陥るものも少くなかつた。また、それに附隨して歌道に門閥の生じたことも、見遁せないことである。

平安時代には、眼で讀む歌と、口で吟誦する歌とは、既に完全に

分離してしまつてゐた。そして、眼で讀む歌即ち和歌が、文學として發達してゆく一方、口で吟誦する歌即ち謠物うたものは、曲譜を伴なつて別途の發達を遂げた。神樂歌及び催馬樂まげはその代表的なもので、いづれも奈良朝の頃から行はれてゐたものではあるが、平安時代に入つて始めて現存するものの如き完成した體をなしたのである。神樂歌は、その名が示す如く神前にて奏する謠物であり、催馬樂は、古い時代の民謠が上流の謠物となつたもので、その形式は二者共に雑多で、一定してゐないが、前者には眞率莊重にして優雅和暢な趣があり、後者には人情味が濃厚にして民衆的・抒情的な分子が多い。なほこの他、民謠から出た謠物に東遊風俗歌等もあつた。

銀の目抜の太刀をさげはきて奈良の都を練るは誰が子を練るは誰が子ぞ
（神樂歌）

この歌は「拾遺集」にも見えてゐる。

「ヲケ」は拍子詞である。

朗詠と今様

飛鳥井に飛鳥井に宿りはすべしヲケ蔭もよし蔭もよし御水も寒し御秣もよし(催馬樂)

更にこの時代の中期頃から流行し始めた謠物は、朗詠と今様とである。朗詠は漢詩文の佳句、或は古來の名歌に曲節を附して朗吟したもので、それを集めた書に、藤原公任の撰した「和漢朗詠集」と、藤原基俊の撰した「新撰朗詠集」とがある。また、今様は當世風の謠物の義で、大體、七五の四句から成つてゐるが、長短さまざまの句を交へた長篇もあり、形式は必ずしも一定してゐない。そして、その内容は和讚といふ佛徳を讚する謠物の系統を引いて、佛敎に關することを歌つたものが多いけれども、當時の民衆の生活をまざくと傳へた民謠風のものも、相當の數に上つてをり、その自由な表現形式が、和歌などには見られない生きくとした感じを與へる。今様を集めたものには、後白河法皇の御撰にか

かる「梁塵秘抄」がある。

燭に背いて共に憐む深夜の月 花を踏んで同じく惜しむ少年の春

(背燭共憐深夜月 踏花同情少年春) (白居易和漢朗詠集)

佛は常にいませども 現ならぬぞあはれなる 人の音せぬ曉に

ほのかに夢に見え給ふ (梁塵秘抄)

誘給へ隣殿 大津の西の浦へ雜魚すきに この江に海老なしあの

江へ往座せ 海老まじりの雜魚やあると (同上)

四 物語と日記・隨筆

簡便な假名の使用が弘まつて來るにつれて、漢文學は漸く衰運に向かひ、これに代つて、國文で綴つた物語、日記、隨筆等が流行し始め、かくして、散文が文學の中樞を形づくる時代を現出するに至つた。そのうち、まづ物語を見るに、初期における物語には、二

歌物語と傳奇物語

伊勢物語と大和物語

つの系統があつて、一は和歌の流行に育まれて生まれた歌物語であり、他は支那の神仙思想などを基礎として綴られた傳奇物語である。

現存する歌物語のうち最も古く且代表的なものは「伊勢物語」で、在原業平の歌を中心とする百二十餘の短篇を集めてある。その作者は不明であるが、殆ど各篇が「昔男ありけり」といふ語をもつて書き起され、業平らしい風流貴公子の逸話が、簡古にして餘情に富む筆致で寫されてゐる。また、この物語の流を汲んで、和歌に關する古今の説話を集めたものに「大和物語」がある。

昔男ありけり。身は賤しながら、母なん宮なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに師走ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば歌あり。

「大和物語」の作者も不明である。

「さらぬ別れ」は、通れ難い別れ、即ち死別をいふ。

「人の子」は、親をもつ子、即ち自分をいふ。

竹取物語と宇津保・落窪の各物語

古いぬればさらぬ別れのありといへばいよ／＼見まくほしき君かな
かの子、いたううち泣きてよめる、

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子
(伊勢物語)

傳奇物語の最古のものは「竹取物語」であつて、「伊勢物語」と共に、この時代の物語の先驅をなしてゐる。これまた、作者は知ることが出来ないが、「伊勢物語」が短篇を集めたものであるのに對し、首尾一貫した長篇になつてをり、外來の神仙思想の影響を受けてゐる點が多く、その主人公は、竹取の翁が竹の中から見出だした姫、實は月界の仙女で、この仙女が或年の八月十五日、満月の夜に遂に昇天するまでの経緯が、當時の人情・風俗を織りまぜて、興趣深く脚色してある。文章は素朴な上に、優雅な趣もあり、情景・心理

「宇津保物語」の作者も不明である。

「まじりて」は分入つて。

「本」は幹をいふ。

の描寫にも、見るべきところが少くない。なほ、この物語の系統を引くものに「宇津保物語」「落窪物語」があるが、「竹取」よりは後に出てたものだけに、いづれも「竹取」に比して一層世態・人情に觸れた點が多く、内容の複雑味・描寫の精細味も一段と加はつてゐる。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬づの事につかひけり。名をば讚岐造麻呂となんいひける。その竹の中に、本光る竹なん一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうてゐたり。翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なめり」とて、手にうち入れて、家に持ちて來ぬ。妻の姫にあづけて養はす。美しきこと限りなし。いと幼ければ、籠に入れて養ふ。竹取の翁、この子を見つけて後に、竹を取るに、節を隔てて節ごとに、金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて翁やう／＼豊かになりゆく。この兒養ふほどに、すく／＼と大きになりまさる。

(竹取物語)

源氏物語

紫式部は一條天皇の中宮彰子に仕へた。

「竹取」「伊勢」に始まつた平安時代の物語は、「宇津保」「落窪」等を経て「源氏物語」に至つて、その發達の極點に達した。歌物語と傳奇物語との二つの系統が、ここに渾然と融合されたといつてもよいであらう。實に「源氏物語」は、たゞにこの時代の文學の王座を占めるばかりでなく、古今を通じて國文學の最大傑作として世に推重され、その名は遠く海外にまで響いてゐるのである。作者は藤原爲時の女紫式部で、五十四帖といふ龐大な長篇をなし、前篇は光源氏を、後篇は光源氏の子薫大將を主人公として、爛熟した平安盛世の貴族生活の諸相を、内面的感情の機微に至るまでさながらに描破し、その中に作者の人生觀・社會觀乃至時代的理想を寓してゐる。また、結構においても、照應の妙を極め、事相が複雑してゐるにもかゝらず、整然として一絲亂れるところなく、局面のさまざまに展開してゆくにつれ、筆力は思ふまゝに伸びて、その

「行幸」とは、紅葉賀の當日、帝が朱雀院へ行幸遊ばされたことをいふ。

「垣代」は樂人。

「有職」はその道に通じた人の意。
「左右の樂」は唐樂と高麗樂。

「青海波」は唐樂の「光源氏」が舞つてゐるのである。

「見知り顔」は風流をよく辨へてゐる様子。

間少しも斧鑿の痕を残してゐないことは、まさに驚異に値するものがある。

行幸には皇子たちなど、世に残る人なく仕うまつり給へり。春宮もおはします。例の樂の船ども漕ぎめぐりて、唐土高麗と盡くしたる舞ども、種多かり。樂の聲鼓の音、世を響かす。中略垣代など、殿上人も地下も心殊なりと世の人に思はれたる有職の限り整へさせ給へり。宰相二人、左衛門督、右衛門督、左右の樂のことを行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬをとりつゝ、おのゝ籠りゐてなん習ひける。木高き紅葉の蔭に四十人の垣代、いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞えて吹迷ひ、いろゝに散りかふ木の葉の中より、青海波の輝き出でたるさまいと恐しきまで見ゆ。挿頭の紅葉いたう散り過ぎて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大將挿しかへ給ふ。日暮れかゝるほどに、けしきばかりうち時雨れて、空の氣色さへ見知り顔なるに、さるいみじき姿

「入綾」は引込際にまた引返して舞ふ舞である。
「せいゝろ寒く」は寒けのするほどに絶妙での意。

源氏以後の物語

「狭衣物語」は紫式部の女大貳三位の作といはれるが、確かでなく、その他の物語も皆作者は不明である。

土佐日記

に、菊のいろゝうつろひえならぬを挿頭して、今日はまたなき手を盡くしたる入綾のほど、そゝろ寒く、この世のこととも覺えず。物見知るまじき下人などの、木の下、岩隠れ、山の木の葉に埋もれたるさへ、少し物の心知るは、涙落しけり。

(源氏物語紅葉賀の巻)

「源氏物語」を極點として、物語は衰退の機運に向かつた。「源氏」以後に出でた「狭衣物語」「濱松中納言物語」とりかへば「物語」「夜半の寢覺」堤中納言物語等の諸物語は、いづれも「源氏」の摸倣に終つて、それ以上に殆ど一步も出てゐないが、中で「狭衣物語」が、狭衣大將を主人公として、頽廢的な氣分を濃厚に出してゐるのと、「堤中納言物語」が、特異な題材を捉へて、耽美主義的な情調を漂はせてゐるのが、やゝ出色のものといふべきであらう。

物語と並行し、これと互に相影響しあつて發達した國文の日記・隨筆の中にも、またすぐれたものが多い。假名で書かれた國文

日記の如きは、紀行の如きは、
文の如きは、裁り、見聞の如きは、
あり、形式、またの如きは、
乃、自、見聞の如きは、
如、至、見聞の如きは、
の、内容、形式、またの如きは、
内、容、形式、またの如きは、
筆、容、形式、またの如きは、
多、い、別、の、出、

の日記は、「土佐日記」に始まる。「土佐日記」は、紀貫之が朱雀天皇の承平四年、土佐守の任満ちて、同年十二月二十一日、國守の館を立ち、翌年二月十六日、歸洛するまでの日々、舟旅の模様、及び久々、京都の土を踏み、家に歸り着いた時の感懐等を記した旅日記で、冒頭に「男もすといふ日記」といふものを、女もして試みんとするなり。」とあるので、わかる通り、當時、男子は、いまだ漢文のみで記し、假名を卑しんで、これを用ひることがなかつたから、故意に女子の作であるかの如く書きなしてある。文章は簡潔平明で、輕妙洒脫な味はひを多く含んでゐる。

二月一日朝の間雨降る。午時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふ所より出でて漕行く。海の上昨日の如くに風浪見えず。黒崎の松原を経て行く。所の名は黒く、松の色は青く、磯の浪は雪の如くに、貝の色は蘇芳に、五色に今一色ぞ足らぬ。この間に今日は箱の浦といふ所より綱

「蘇芳」は黒みがかつた紅色。

手引きて行く。かく行く間に、或人の詠める歌、

玉櫛笥箱の浦浪立たぬ日は海を鏡と誰か見ざらん

(土佐日記)

土佐日記以後の日記

「土佐日記」が出て後、日記文學は文學の一分野を占め、幾多の後繼作品を出したが、「土佐日記」に次いであらはれたのは、右大將道綱の母の筆に成る「蜻蛉日記」で、その夫藤原兼家との家庭生活を主として記してゐる。その後、藤原氏全盛時代に入つては、「和泉式部日記」「紫式部日記」等があらはれ、次いで「更級日記」「讚岐典侍日記」等、すぐれた女流の日記が續々とあらはれた。これ等はそれぞれ異なる興味に満ちてゐるが、「和泉式部日記」には、陶酔的な感情生活が描き出されて、眞情が流露してをり、「紫式部日記」には、宮廷生活が側面から寫し出されて、隨所に作者の見識がひらめいてゐる。また、「更級日記」は菅原孝標の女の作で、父が上總介の任は

枕草子

清少納言は一條天皇の皇后定子に仕へた。

てて歸洛する時、伴なはれて東路の旅に上つた時の心情から筆を起し、都に上つて後、幻滅の悲哀を嘗める有様がつましく記されてをり、「讃岐典侍日記」は藤原顯綱あきつなの女の作で、堀河・鳥羽の二朝に仕へた頃のことことが綿密に敘されてゐる。

「源氏物語」と並んで、平安時代文學の雙璧といはれるものは、隨筆「枕草子」である。作者は清原元輔の女清少納言で、宮廷に奉仕中の事實の追憶、折にふれての見聞感想、また自然の景致などを、三百段ばかりに分つて敘述し、その觀察は鋭敏にして、着眼は警拔を極め、機智は到るところにひらめき、諷刺は人の肺腑を刺すものがある。更に文章に至つては、少しも法格に拘泥せず、長短の語句を巧に錯綜せしめ、或は極端な省筆法を用ひてゐるなど、勝氣にして才氣に満ちた作者の人物をよく反映してゐる。

正月一日・三月三日は、いとすらゝかなる。五月五日は、曇りくらしたる。

七月七日は七夕、九月九日は重陽である。

「うつしの香」は菊の着縮きざめたにうつつた菊の香。「汗疹」は童女の上衣。「削氷」は夏、氷室から取出した水を削つたもの。「甘葛」は甘葛の煎、食物に甘味をつけるもの。

榮華物語と大鏡・今鏡

七月七日は、曇り、夕つ方は晴れたる空に、月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉方より雨すこし降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたく濡れ、うつしの香ももてはやされたる。つとめてはやみにたれど、なほ曇りて、やゝもすればふり落ちぬべく見えたるもをかし。
(枕草子)
あてなるもの、薄色うすいろに白がさねの汗疹あせみ。かりの卵たまご削氷けりりの甘葛あまづらに入りて、新しさ金椀かなまりに入りたる。水晶すいさうの數珠ずい。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しきちごの覆盆子いちじまくひたる。
(同上)

五 歴史物語と説話文學

豪華な藤原氏の全盛時代が去ると、爛漫たる藝術の花もおのづから凋落した。そして、この落莫たる文學界に發生したのは、華やかな前代を回想する文學、即ち歴史物語で、「榮華物語」「大鏡」「今鏡」等がそれであつた。「榮華物語」は、「この世をば我が世とぞ思ふ」と歌

つた藤原道長の榮華の一生を中心として、編年體に記述したもので、四十帖から成り、作者は從來、赤染衛門といはれて來たが、直ちに斷定することは出來ない。榮華物語が編年體をとつてゐるのに對して、紀傳體をとり、文徳天皇から後一條天皇に至るまでの帝紀、冬嗣から道長に至るまでの列傳を分ち記した、大鏡は、百歳を遙かに越えた老翁等の昔語といふ形式になつてをり、文章は剛健で、巧に事實の核心を捉へ、終始文勢に弛緩がない上に、批判的態度の可なり辛辣なものがある。作者はやはり不明であるが、六國史の後を承けた假名文の國史として、まさに白眉と稱すべきものであらう。また「今鏡」は「大鏡」に次ぐ歴史物語で、形式内容共に「大鏡」の摸倣であり、後一條天皇の朝から高倉天皇の朝までの事蹟を記してゐる。

かゝる御勢に添へて、入道させ給ひて後は、いとど勝らせ給へりと

「今鏡」の作者も不明である。

道長の法成寺造營の條である。

「さかな目」は「權者」は佛の衆生を救ふために生まれたる人をいふ。

見えさせ給ふにも、なほなべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は遙かに拜みまゐらす。今はこの御堂のあたりの本草ともならんと思へる人のみ多かり。そなたさまに赴けば、海の浪もやはらかに立ちて、この御堂の物を持って運ばせ、河も水澄みて、快く浮かべ持て參ると見ゆ。なほなべてこの世のこととは見えさせ給はず。まづは、先年に、長谷寺にある僧の御祈をいみじうして寝たりける夢に、大いにいかめしき男の出できて、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆のために生まれ給へるなり。とぞ見えさせ給ひける。また天王寺の聖徳太子の御日記には、「王城より東に佛法弘めん人を我と知れ」とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろそかならぬ御事なり。

(榮華物語疑の卷)

かゝれば、或は聖徳太子の生まれ給へると申し、或は弘法大師の佛法興隆のために生まれ給ふとも申すめり。げにそれは、翁らがさかな目にも、たゞ人とは見えさせ給はざめり。なほ權者にこそおはしますべ

「御靈會」は謀
叛人の怨靈を
祀つた御靈宮
の祭。諸社の
「祭」は諸社の
祭の意。
「里の刀禰、村
の行事」は里
や村の長をい
ふ。
「火祭」は鎮火
祭。

今昔物語と打
聞集・江談抄

かめれとなん、仰ぎ見奉る。かゝれば、この御世の樂しきこと限りなし。その故は、昔は殿ばら宮ばらの馬飼、牛飼、何の御靈會祭の料とて、錢紙米など乞ひのゝしりて、野山の草をだにやは刈らせし。仕丁御物もち出でてきて、人の物とり奪ふことの絶えにけり。また里の刀禰村の行事出でてきて、火祭や何やと、わづらはしくせめしこと、今は聞えず。かばかり安穩泰平なる時には、あひなんやと思ふは、翁らが賤しき宿りも帯紐をとき、門をだにささで、安らかにのび臥したれば、年も若え、命も延びたるぞかし。

(天鏡太政大臣道長)

歴史物語が發生したのと同じ風潮の影響を受けて流行し始めたものに、なほ「今昔物語」「打聞集」「江談抄」等の説話文學がある。これ等は「日本靈異記」の系統を引くもので、この時代の末から鎌倉時代にかけて大に行はれた。「今昔物語」はもと三十一卷から成る我が國最大の説話集であるが、そのうち三卷が缺け、現存してゐる卷數は二十八である。實に一千に餘る説話が、天竺、震旦、本朝

「打聞集」は編
者不明、江談
抄は藤原實
兼の編である。

の三部に分つて類輯されてをり、各説話はすべて「今は昔」といふ語によつて始められ、「日本靈異記」の流を汲んでゐるだけに、やはり佛教説話が大部分を占めてゐるが、本朝世俗の説話中には、當時の庶民生活が、簡勁素朴な和漢混淆の新體によつて、まのあたり見るやうに寫し出され、平安時代末期の思想、人情、風俗等を知る上に、絶好の資料を提供してゐる。編者は宇治大納言源隆國といはれるけれども、疑はしい。また、「打聞集」は「今昔」と同じやうな説話集であり、「江談抄」は主として和漢の詩人に關する説話を集めたものである。

今ハ昔、登照トイフ僧アリケリ。諸ノ人ノ形ヲ見、音ヲ聞キ、翔ヲ知リテ、命ノ長短ヲ相シ、身ノ貧富ヲ教ヘ、官位ノ高下ヲ知ラシム。カクノ如ク相スルニ、敢ヘテ違フコトナカリケレバ、京中ノ道俗男女、コノ登照ガ房ニ集ルコト限リナシ。然ルニ、登照物ヘ行キケルニ、朱雀門ノ前ヲ渡

リケリ。ソノ門ノ下ニ男女ノ老少ノ人多ク居テ休ミケルヲ、登照見ルニ、コノ門ノ下ニアル者ドモ、皆タマ今死ヌベキ相アリ。コレハイカナル事ゾト思ヒテ、立留ツテヨク見ルニ、ナホソノ相アラハナリ。登照コレヲ思ヒ廻ラスニ、タマ今コノ者ドモノ死ナンコトハ、何ニヨリテゾ。モシ惡人ノ來テ殺サンニテモ、少々ヲコソ殺サメ、皆忽チニ死ヌベキ様ナシ。怪シキ態カナト思ヒ廻ラスニ、モシコノ門ノタマ今倒レナンズルカ。然ラバゾ、ウチ壓ハレテ、忽チ皆死ヌベキト思ヒ得テ、門ノ下ニ居並ミタル者ドモニ向カヒテ、ソレ見ヨ、ソノ門倒レヌルニ、ウチ壓ハレテ皆死ナントス。トク出デヨ。ト音ヲ舉ゲテイヒケレバ、居タル者ドモ、コレヲ聞キテ迷ヒテ、ハラ／＼ト出デケリ。登照モ遠ク去キテ立テリケルニ、風モ吹カズ、地震モ振ハズ、塵バカリ門ユガミタルコトモナキニ、俄カニ門タマ傾キニ傾キ倒レヌ。然レバ急ギ走り出デタル者ドモハ命ヲ存シヌ。ソノ中ニ強顔クテ遅ク出デケル者ドモハ、少々ウチ壓ハレテ死ニケリ。

(今昔物語卷二十四)

第三章 鎌倉時代

一 概 観

源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから、北條氏が滅亡するまで凡そ百五十年間を鎌倉時代といつてゐる。この時代は、まさに武家時代の初頭に當り、鎌倉を中心とする武家的文化と、京都を中心とする公家的文化とが相對立して、互に影響を及ぼし、遂にこの時代の末期に至つて、両者が完全に調和融合したのであつて、いはば文化の過渡期であつた。

王朝四百年の泰平の夢は、武士の擡頭によつて、無慙に破られた。そして、武士が政權を握ると同時に、貴族政治の積弊は一掃され、武士道を基調とする簡易質素にして尙武的な氣風が養成さ

時代の範圍と
文化の動向

時代の特徴と
文學の傾向

れたが、しかし、文事の素養に至つては、武士は全くこれを有してゐなかつたから、學問・文藝は自然衰頽に向かひ、徒に傳統を重んじ、過去の文學の摸倣をなすにとゞまつた。この間にあつて、纔かに文學界を維持して、新文學を樹立したのは、僧侶たちであつた。故に、この時代の新興文學には、概ね宗教的色彩が濃く、平安時代の文學に見るやうな情趣本位の遊戲的分子は殆どなく、眞摯にして切實な厭離穢土、欣求淨土の思想と、術學的・談理的・教訓的の傾向とを豊かにもつてゐる。かくの如き内容の變化につれて、その文體もまた、文章史上二期を劃し、平安時代の後期から發達した剛健莊重な和漢混淆體が完成された。また、この時代には宋から新に禪宗が傳へられたのみならず、淨土宗・淨土眞宗・法華宗等の新宗派も競ひ起り、たま／＼戰亂に煩はされた人心の根柢に觸れて、その人生觀を著しく深刻ならしめた。一方、儒教の勢力も

向上したが、漢文學は平安時代後期以降全く振はなかつた。

二歌 謠

新古今和歌集

「古今集」後撰集「後拾遺集」後拾遺集「金葉集」後拾遺集「詞花集」後拾遺集「新古今集」後拾遺集「千載集」後拾遺集「八代集」後拾遺集

定家は俊成の子、和歌の體を有心體といふ。

「千載集」の歌風を大成したものは「新古今集」である。「新古今集」は、後鳥羽上皇が源通具・藤原有家・同定家・同家隆・同雅經の五人をして撰せしめられ、元久二年に成つたもので、その表現が「千載集」に比して一段と洗煉されたのみならず、内容もまた大いに充實した。即ち或は警拔な倒置法を用ひて清新味をもたらし、或は結句を體言止にして聲調を流麗にするなど、修辭上の技巧の極致が盡くされてゐると共に、内容は佛教思想の影響を受けて深遠な想念に富み、情景融合の妙趣を具へたものが多いのである。作者では、撰者の定家と家隆とが擢んでゐるが、特に定家は、この時代の歌人中第一人者の名が高く、俊成の唱へた幽玄體を更に一

式子内親王は
後白河天皇の
皇女であらせ
られる

歩進めて、情趣に徹した歌を詠み、彫琢の妙を極めてゐる。家隆は、これに對し、自然な姿を率直に歌つて、淡々たる味はひを出してゐるが、なほこの二人の外にも、敍景歌にすぐれた藤原良經、閑寂な趣を好んで詠んだ寂蓮法師、女流の式子内親王、宮内卿俊成の女等は、代表的な歌人であつた。そして、これ等の歌人の上に立たせられた後鳥羽上皇もまた、すぐれた御歌才であらせられたことは、ここに申すまでもないことであらう。

見わたせば山もと霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけん

(後鳥羽上皇)

霜まよふ空にしをれし雁がねの歸るつばさに春雨ぞ降る

(藤原定家)

谷川のうち出づる波も聲たてつ鶯さそへ春の山風

(藤原家隆)

うちしめりあやめぞかをるほととぎす鳴くやさつきの雨の夕暮

(藤原良經)

たづね来て道分けわぶる人もあらし幾重もつもれ庭の白雪

(寂蓮法師)

見るまゝに冬は來にけり鴨のゐる入江の汀うすごほりつゝ

(式子内親王)

霜を待つ籬の菊の宵の間にちきまがふ色は山の端の月

(宮内卿)

金槐集

宮廷歌人が専ら古今調の歌を作つてゐる時、獨り鎌倉にあつて萬葉調の歌を詠み、異彩を放つたのは、三代將軍源實朝である。その家集である「金槐集」に收められた歌には、眞率な感情が、雄渾な格調によつて詠ひ出されてをり、高古の趣を具へてゐる。

時により過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ給へ

(源實朝)

新古今和歌集以後の歌壇

「夫木抄」は藤原長清の撰である。

「新古今集」以後、新勅撰「續後撰」「續古今」「續拾遺」「新後撰」「玉葉」「續千載」「續後拾遺」等、多くの勅撰集や、また「夫木抄」の如き私撰集が續出したが、和歌の發達は「新古今集」時代をもつて一段落を告げた形で、歌壇は、定家の子孫が分れた二條・京極・冷泉三家の門閥の争に終始するのみであつた。

宴曲

この時代の中葉から室町時代にかけて流行した謠物に宴曲がある。宴曲は宴席の間に謠はれたもので、主として七五調をなし、題材は自然・人事の百般にわたつてゐるが、故事・成語を補綴し、表面的の修飾にのみ走つて、内容は殆ど空疎であり、たゞ前代の朗詠や今様から室町以後の謠曲や小歌に移つてゆく過渡期の謠物として注意されるに過ぎない。

題は「春」

霞たなびく雲居より 春立ちけりな天の戸の 明くる氣色ものどかにて 鶯さそふ春の風 かすむとすれど淡雪の 下草はなほ結

ばれて 岩門の氷解けやらす(下略)

(宴曲集)

三 歴史物語と戦記物語

水鏡と愚管抄
「水鏡」の作者も不明である。

なほ源氏三代から執權北條政村の世に至るまでの凡そ八十年間の鎌倉幕府の歴史を、吾妻鏡の文に「吾妻鏡」あり、その文は和文脈を混じり、特異な漢文で記述してある。

平安時代にあらはれた假名文の國史「大鏡」「今鏡」の系統を引いて、この時代には「水鏡」が出た。「水鏡」は「今鏡」の後に續くものではなく、「大鏡」の前に接するもので、神武天皇から仁明天皇に至るまでの事蹟が記されてゐる。この「水鏡」が前代の文學の模倣であるのに對し、最も鎌倉時代らしい色彩を具へて出たのは、「愚管抄」である。作者は慈鎮和尚といはれ、雄勁な和漢混淆體をもつて、神武天皇から順徳天皇に至るまでの事蹟を敘した後、天下の治亂政道の興廢等に對する史論を記し、季世を慷慨して、言々火を吐く如き熱血の文字となつてゐる。實に我が國における史論書の嚆矢といはなければならぬ。

一跡ノ成行ヤウハ頼朝の運命の傾いたことをいふ。「顯二ハ」は表面的にはの意。「宗廟ノ神」は皇祖神。

保元物語・平家物語(源平盛衰記)

平氏ノ跡カタナキ滅ビヤウ、マタコノ源氏頼朝將軍昔今アリガタキ器量ニテ、ヒシト天下ヲシヅメタリツル跡ノ成行ヤウ、人ノシワザトハ覺エズ。顯ニハ武士ガ世ニテアルベシト、宗廟ノ神モ定メ思シメシタルコトハ、今ハ道理ニカナヒテ必然ナリ。ソノ上ハ平家ノ多ク怨靈モアリ。タ、冥ニ因果ノコタヘユクニヤトゾ、心アル人ハ思フベキ。

(愚管抄)

平安時代の末に保元・平治の兩亂が起つてから、引續いて源平の合戦があつたが、これ等の戦亂を主題として描いた文學に「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」等の戦記物語がある。しかし、戦亂を主題としてゐるとはいつても、その中に、高雅な風流譚や和漢の傳説故事なども取合はされてをり、史實に空想を加へ、聲調のよく調うた和漢混淆體をもつて、盛衰興亡する人生の相を、戲曲的に活寫してゐるのであつて、一般に文學の衰退した鎌

「平家物語」は盲法師が琵琶に合はせて語つたが、これを平家琵琶まふは平曲といふ。

「福原落」の條

倉時代に、獨り燦爛たる光彩を放つた。随つて、國民の間に廣く愛讀され、或は琵琶に合はせて語られなどした結果、物語の組織内容がさまざまに増補改竄されおびたしい異本を派出するに至つたが、その作者はいづれも明らかでない。中で、「保元物語」と「平治物語」とは、共に三卷から成り、それ／＼保元の亂・平治の亂を題材とした姉妹篇で、結構も筆致もよく似てをり、比較的質實簡素にして古雅な趣を具へてゐるが、「平家物語」は普通、十二卷から成り、源平兩氏の榮枯を題材として、極めて華やかであると同時に哀韻にも富み、波瀾曲折も多く、行文もまた流麗を極めて、一大敘事詩をなしてゐる。なほ、「源平盛衰記」四十八卷は、「平家物語」を増補した一種の異本と見るべきもので、「平家物語」に比すれば、詩味に乏しく、やゝ冗漫の嫌がある。

さるほどに平家は福原のふるさとにして、一夜をぞあかさされる。折

「空夜」は何事もない夜。
「故入道相國」は平清盛

「鴛鴦の瓦」は鴛鴦の模様の瓦

「主上」は安徳天皇

「蟋蟀のきりぎりす」は要するに「きりぎりす」(今のこぼろぎ)のこと
「東關の麓」は富士川の戦を指すのであらう

ふし秋の月は下の鼓なり。深更空夜閑にして、旅寝の床の草枕露も涙に争ひて、たゞもののみぞ悲しき。いつ歸るべしとも覺えねば、故入道相國の造りおき給へる福原のところへを見給ふに、春は花見の岡の御所、秋は月見の濱の御所、泉殿・松陰殿・馬場殿・二階の棧敷殿、雪見の御所、萱の御所、人々の館ども、五條の大納言、國綱の卿の承つて造進せられし里内裏、鴛鴦の瓦玉の登いづれも、三とせがほどに荒れはて、舊苔道を塞ぎ、秋の草門を閉づ。瓦に松生ひ、垣に蔦茂れり。臺傾いて、苔むせり。松風のみや通ふらん。簾たえ聞あらはなり。月影のみぞさし入りける。あけぬれば、福原の内裏に火をかけて、主上をはじめまゐらせ、人々みな御船に召す。都を出でしほどこそはなけれど、これも名残は惜しかりけり。海士の焼く藻の夕煙、尾上の鹿の曉の聲、渚々に寄する波の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきりぎりす、すべて目に見、耳に觸るゝことの、一つとして、あはれを催し、心を傷ましめずといふことなし。昨日は東關の麓に轡を並べて十萬餘騎、今日は

「在原の某」は在原業平の隅田川にて詠んだ歌は「一名にしおはばいざことと思ふ人ありやなしや」とこれは流布本平家物語である

住吉物語等

擬古物語の作者はいづれも不明である

西海の波の上に纜を解いて七千餘人、雲海沈々として、青天既に暮れなんとす。孤島に夕霧隔てて、月海上に泛べり。極浦の波を分け、潮に引かれて行く船は、半天の雲に溯る。日數経れば、都は山川ほどを隔てて、雲居のよそにぞなりにける。はるゝきぬと思へども、たゞ盡させぬものは涙なり。波の上に白き鳥のむれゐるを見給ひては、あれならん。在原の某の、隅田川にてこととひけん、名もむつまじき都鳥かなとあはれなり。壽永二年七月二十五日に平家都を落ちはてぬ。

(平家物語卷七)

四 擬古物語と説話文學

戦記物語が新興文學として光彩を放つてゐる一方には、また平安時代の物語の傳統を逐ひ、糟粕を嘗めた「住吉物語」「石清水物語」等の擬古物語が出た。しかし、これ等は室町時代の御伽草子に移る過渡期の産物であつて、文學的價値の極めて乏しいもの

である。

また、「今昔物語」の流を汲んであらはれた説話文學は、「宇治拾遺物語」「十訓抄」「古今著聞集」「古事談」等の世俗説話集と、「寶物集」「撰集抄」「發心集」「沙石集」等の佛教説話集とであつて、これも過去の盛世を顧みることには急にして、創作的氣力の枯渴した時代の風潮を反映してゐるものと見なければならぬ。その中で、比較的に文學的價値の高いものは、「宇治拾遺物語」「十訓抄」及び「古今著聞集」で、前代の「今昔物語」がたゞ説話を説話として無造作に記してゐるのに對して、これ等の集に見える説話には、小説的な技巧が施され、その上、教訓的傾向を多分にもたせてある。なほ、佛教説話集の「沙石集」も、野趣の漲つた、朴訥愛すべきものである。

今は昔、甲斐國に館の侍なりける者の、夕暮に館を出でて、家さまに行きける道に、狐の逢ひたりけるを、追ひかけて、墓目して射ければ、狐の

「古今著聞集」は橋成季の作であり、「古事談」は源顯兼、康頼、長明、沙石集は無住法師がそれ、他は不明である。

「墓目」は朴ま、たは桐で作り、中を空にして、數箇の孔をあけた鐵

腰に射當ててけり。狐射まらばかされて、鳴きわびて、腰を引きつゝ草に入り、にけり。この男、墓目を取りて行くほどに、この狐、腰を引き、先に立ちて行くに、また射んとすれば、失せにけり。家、今四五町かと思へて行くほどに、この狐、二町ばかり先立ちて、火をくはへて走りければ、「火をくはへて走るは、いかなる事ぞ」とて、馬をも走らせけれども、家の許に走り寄りて、人になりて、火を家に放つてけり。人のつくるにこそありけれ」とて、矢を射けて走らせけれども、つけはてければ、狐になりて、草の中に走り入りて、失せにけり。さて、家焼けにけり。かゝるものも、忽ちに鱷を報ふなり。これを聞きて、かやうのものをば、構へて打ずまじきなり。

(宇治拾遺物語卷三)

法然をはじめ親鸞、日蓮、一遍の如き、この時代の新佛教の祖師たちの法語遺文の類にもまた、佛教文學として價値の高いものがあつたが、就中、法然と日蓮との作は最も傑出し、その高潔な人格が句々ににじみ出てゐる。

法語遺文

十六夜日記・東關紀行

「海道記」の作者は貞應二年四月、東關紀行の作者は仁治三年八月、京都に立つたのである。

「小野の宿」は近江國

五 日記・紀行と隨筆

この時代の日記・紀行には「十六夜日記」「海道記」「東關紀行」等があった。「十六夜日記」は藤原爲家の後室阿佛尼が、その子爲相の所領を回復する訴訟のため、建治三年十月、か弱い女性の身で鎌倉に下つた時の旅日記で、深い母性愛を漂はしてゐる。しかし、この「十六夜日記」は、平安時代の日記文學の傳統の上に立つものであるが、同じく都から鎌倉に下つた時の紀行である「海道記」と「東關紀行」とは、いづれもこの時代の新文體である和漢混淆體を用ひ、戦記物語の道行文體と共通する華麗明快な趣をもつてゐる。作者は從來「海道記」は源光行、「東關紀行」は光行の子親行といはれて來たが、いづれも確かでない。

十七日の夜は、小野の宿といふ所にとゞまる。月出でて、山の峰に立ち

つゞきたる松の木の間、けぢめ見えて、いとおもしろし。ここは夜深き霧のまよひにたどり出でつ。醒が井といふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。
むすぶ手に濁る心をすゝぎなばうき世の夢やさめが井の水
とぞ覺ゆる。
(十六夜日記)

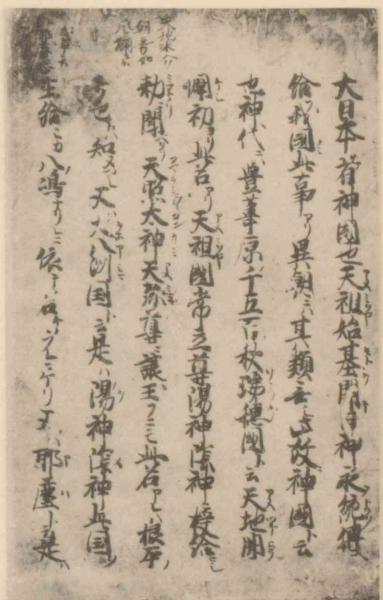
十日、豊川を立ちて、野くれ里くれはるくと過ぐれば、峰野の原といふ所あり。日、野の草の露より出でて、若木の枝にのぼらず、雲は峰の松風に晴れて、山の色、天と一つに染めたり。遠望の感情つきがたし。

山の端は露より底にうづもれて野ずゑの草にあくるしのめ
(海道記)

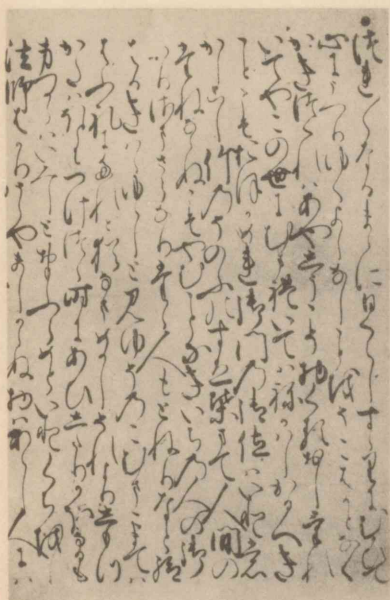
この時代における代表的な隨筆は「方丈記」である。鴨長明の作で、前半には主として無常な世相を寫し、後半には作者の境涯や心事を記してをり、思想は厭世的の色彩をもつて濃厚に彩られ

方丈記

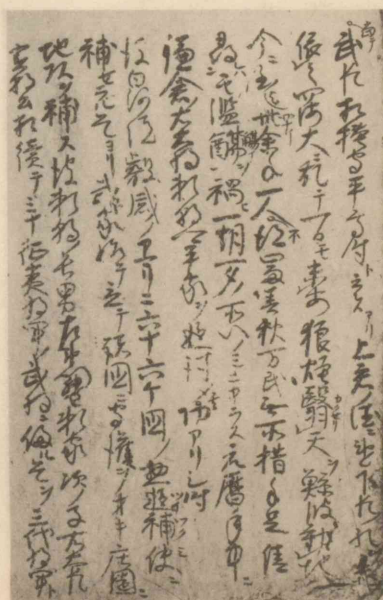
「豊川」は三河國



(本山白) 記統正皇神



(本徹正) 草 然 徒



(本田神) 記 平 太



(本筆自悦光) 曲 謠

第四章 室町時代

一 概 観

時代の範囲

室町時代といへば、普通、足利義満が京都室町に幕府を開いてから、足利氏が滅び、織田信長が天下を統一するまでを指すのであるが、ここでは廣義に解して、吉野朝時代から室町幕府時代を経て安土・桃山時代に至るまで前後約二百七十年間を包括して、室町時代といふのである。

時代の特色と文學の傾向

この時代は、戦亂が相次ぎ、國史上、空前の暗黒時代であつた。後醍醐天皇の建武中興の御偉業は、一たび成つたが、それも束の間で、再び天下は、武家である足利氏の手へ歸し、義満・義政等の榮華の世を現出して、暫く平穩無事な日が續くと思ふうち、やがて應

仁の大亂が起り、これより安土・桃山時代に至るまで、天下は全く戦亂の中に没してしまつた。しかし、かくの如き亂離の間にも、新しい文學の芽は萌出でてゐたのであつて、實に室町時代の文學こそ、次の江戸時代の文學の源流となつてゐるものである。そして、前代に傳へられた禪宗が盛んに行はれた結果、文學のみならず、あらゆる藝術がその影響を受けて、清寂簡素にして風韻に富んでゐるが、また、從來知識階級に獨占されてゐた藝術が、次第に民衆に接近して行く傾向を生じたのも、この時代からであつた。なほ、安土・桃山時代には、ヨーロッパ人の渡來があり、海外との交通も盛んになつて、新しく吉利支丹宗門が傳へられたが、その影響は單に同宗門内にとゞまり、一般にはあまり及ばなかつた。

二 歌 謠

その後の勅撰和歌集と新葉和歌集

この時代に入つては「風雅」「新千載」「新拾遺」「新續古今和歌集」が出現した。

鎌倉時代から引續いて次々に出でた勅撰和歌集の數は、「新古今集」以後、十三代に達し、これに「古今」から「新古今」までの八代集を合はせると、二十一代となるが、後花園天皇の勅によつて成つた、その二十一代目の「新續古今集」を最後として、勅撰和歌集は絶えた。しかし、その歌風は、師範家の束縛により、全く型にはまつて、生彩なく、當時和歌の四天王と呼ばれた頼阿・兼好・淨辨・慶雲の四人の歌の如きも、決して舊套を脱したものはなく、清新味は見られない。たゞ後醍醐天皇の皇子宗良親王の御撰にかゝる「新葉集」は、吉野朝の君臣が艱難の中に身を置いて、或は世を憂へ、或は皇統の正閏に對する信念を發揚した歌を收めて、眞情の人に迫るものがある。

都だにさびしかりしを雲はれぬ吉野の奥のさみだれの頃

(後醍醐天皇)

九重に今もますみの鏡こそなほ世を照らす光なりけれ

(後村上天皇)

我が宿とたのまずながら吉野山花になれぬる春もいくとせ

(長慶天皇)

君のため世のため何か惜しからん捨ててかひある命なりせば

(宗良親王)

連歌

連歌の起原は日本武尊が「新治筑波」を過ぎて幾夜もか寝つる一と仰せられたる時、火焼の翁が「かいたは九夜に」は十日は夜に「歌は」といふ時を「ある」といふ

和歌が種々の形式上の束縛を受けて、沈滞しきつてゐる時、清新な内容をもつて起り、大いにもてはやされたものは連歌である。連歌は三十一文字の和歌を上下に分けて二人で唱和するもので、夙く神代の昔から行はれてゐたが、鎌倉時代に入ると、五十韻百韻と続けるやうになり、室町時代に入つては、二條良基の如き名手が出て、その師である救済と共に「菟玖波集」を撰し、また連歌の新しい法式を定め、次いで宗祇があらはれて、「新撰菟玖波

「菟玖波集」は正平十一年撰、四年の撰である

連歌の最初の句を「ひを」といふのみを「作」といふ、倉とみは「行」といふ、たらしは「た」といふ

「雪ながら」は「雪ながら」の御製を基としたもの

背柏・宗長は共、宗祇の足である

集」を撰するに及び、連歌は和歌から獨立した立派な一つの文學として大成した。一體、王朝時代の連歌は、一時の文學的遊戯に過ぎず、専ら機智諧謔を旨としてゐたもので、嚴密な意味ではいまだ文學とはいへなかつたものであるが、ここに至つて、連歌は却つて和歌を壓倒し、歌壇の中心勢力となつたのであつた。そして、この新興の連歌のもつ興趣は、各句が獨立した詩想をあらはすと同時に、前後二句との間に情景上の微妙な關聯を保ち、更に全體的にも變化の妙を極めてゐるところにあるといふべきであらう。

雪ながら山もとかすむ夕べかな

宗祇

行く水遠く梅にほふ里

背柏

河風に一むら柳春見えて

宗長

舟さす音もしるきあけがた

宗祇

月やなほ霧わたる夜に残るらん

霜おく野原秋は暮れけり

鳴く蟲の心ともなく草枯れて

垣根をとへばあらはなる道

柏 長 祇 柏

(下略) (水無瀬三吟百韻)

俳諧連歌

宗祇等によつて革新された連歌は、かくの如く盛んであつたけれども、その法式が次第に煩瑣を加へて來るにつれて、詩想も漸く類型的となつては、自然、衰退に向かふより外はなかつた。そして、かゝる機運に乗じて、機智滑稽を旨とする古風の連歌の復活を企てたのは、山崎宗鑑と荒木田守武とであつた。この二人は室町時代の末期に出で、法式によつて束縛された連歌を解放し、これに飄逸洒落な想を盛つて、卑俗と見えて脱俗した一種の風格を帶びしめた。これを俳諧連歌といふ。俳諧とは滑稽の義に外

小歌

狂言中の小歌を狂言小歌といふ

ならない。その集には、宗鑑に「犬筑波集」があり、守武に「獨吟千句」がある。

とび梅やかろくしくも神の春

われもくのからすうぐひす

のどかなる風ふくろふに山見えて

目もとすさまじ月のこるかけ

(獨吟千句)

室町時代の謠物には、小歌があつた。小歌は、句法・長短は一様でないが、すべて小詩形をなし、當時の民衆の心持が、輕妙な調子で歌ひ出されてゐて、江戸時代の俗謠の趣と共通するところが多し。その集には「閑吟集」があるが、なほ同時代に成つた狂言の中にも散見してゐる。

木幡山路に行暮れて 月を伏見の草枕

(閑吟集)

また湊へ舟が入るやらう 唐艦の音がころりからりと(同上)

増鏡

「大鏡」「水鏡」を合はせて三鏡といひ、なほ「今鏡」を合はせて四鏡といふ。「今鏡」の次に「彌世鏡」といふ歴史物語があつたが、後世散逸した。

「事そぐ」は簡略にするの意。「柴の庵」の云「柴」は西行の住まれずばたゞ住まざらん柴の庵のしはしなる世のものによつた

三 歴史物語と戦記物語

「大鏡」以降のいはゆる「鏡もの」に連なる書では、この時代になつて「増鏡」が出た。「増鏡」は後鳥羽天皇の御降誕から、後醍醐天皇の隠岐より御還幸になるまでの事蹟を記したもので、承久・元弘の兩亂が内容の中心となつてをり、文章は流麗な擬古文を用ひ、正義に即した高邁な識見が隨所にひらめいてゐる。作者はやはり明らかでない。

このおはします所は、人離れ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり事そぎたり。まことに「柴の庵のたゞしはし」と、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、故づきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも夢の

「二千里の外も云々」は白樂天の「三五夜中新月色。二千里外故人心」によつたもの。

神皇正統記と吉野拾遺

また、前代の「愚管抄」を嚆矢とする史論書には、「神皇正統記」があらはれた。これは、吉野朝の重臣北畠親房が、文字通り兵馬倥傯の間にあつて執筆したもので、深邃該博な知識と、朗暢にして巧まない筆致とをもつて、堂々と皇統の正閏を説き、全卷に筆者の氣魄の躍動してゐるのが感ぜられる。同じく吉野朝の侍従藤原吉房の作といはれるものに「吉野拾遺」がある。吉野朝に關する種々の説話の集であつて、その悲惨な運命を悩み悲しむ心情が溢れてゐる。

およそ王土にはらまれて、忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。必

け 我こそは新島守よおきの海のあらき浪風こゝろして吹
(増鏡新島守)

ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人をはげまし、その跡をあはれみて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危むるはしなれど、前車の轍を見ることは、まことにありがたきならひなりけんかし。

(神皇正統記卷六)

太平記

次にこの時代に成つた戦記物語としては「太平記」を擧げることが出来る。作者は小島法師といはれ、吉野朝五十餘年にわたる大動亂の始末を巨細に記して、四十卷といふ厯然たる大卷をなし、文章は遒勁華麗で、人の胸を打ち、熱涙を絞らせるやうな迫力に富み、全卷が終始緊張してゐる。なほ、教訓的分子を含んでゐることが多い點も、他の戦記物語には見られない大きな特色といへよう。

かくては南都邊の御隠家もかなひ難ければ、則ち般若寺を御出であ

「大塔宮熊野落」の條である

「濱ゆふ」は萬年木綿に似た葉を青いついで、紀伊の海濱に多量の皮が幾重にも重なつて、幾重にも重なる。かかる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさら

りて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師、則祐、木寺相模、岡本三河房、武藏坊村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、かれこれ以上九人なり。宮をはじめ奉りて、御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾半ばに責め、その中に年長せるを先達に作りたて、田舎山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。この君もとより龍樓鳳闕の内に長らせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、あやしげなる踏皮、脚巾草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤め懈らせ給はざりければ、路次に行逢ひける道者も、勤修を積める先達も、見尤むることなかりけり。由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ船の梶緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の、松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさら

でだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

(太平記卷五)

義經記と曾我物語

純粹の戦記物語ではないが、その變形と見るべきものに「義經記」と「曾我物語」とがある。前者は源義經の數奇を極めた一生を寫し、後者は曾我兄弟の復讐の經緯を描いてゐる。いづれも國民精神に最もよく觸れた説話であるが、それだけにまた通俗的な色彩が濃く、江戸時代の小説風の趣を多分に含んでゐるものである。

鞍馬の奥に僧正が谷といふ處あり。昔は、いかなる人の崇め奉りけん、貴船の明神とて、靈驗殊勝にわたらせ給ひける。智慧ある上人も行ひけり。鈴の聲も怠らず、神主もありけるが、御神樂の鼓の音もたえず、あらたにわたらせ給ひしかども、世末になれば、佛の方便も、神の驗徳も

劣らせ給ひて、人住荒し、ひとへに天狗のすみかとなりて、夕日西に傾けば、物怪をめき叫ぶ。されば、参りよる人をも取惱ます間、參籠する人もなかりけり。されども牛若、かゝる處のある由を聞き給ひ、晝は學問し給ふ體にもてなし、夜は、日頃一所にてともかくもなりまゐらせんと申しつる大衆にも知らせずして、別當の、御護りにまゐらせたる數妙といふ腹卷に、黄金作の太刀はきて、たゞ一人、貴船の明神へ参り給ひ、念誦申させ給ひけるは、南無大慈の明神、八幡大菩薩、掌を合はせて、源氏を守らせ給へ。宿願まこと成就あらば、玉の御寶殿造り、千町の所領を寄進し奉らん。」と祈請し、正面より未申に向かひて立ち給ふ。四方の草木をば、平家の一類と名づけ、大木二本ありけるを、一本をば清盛と名づけ、太刀を抜きてさんぐに切り、懷より毬杖の玉のやうなるものを取出し、木の枝にかけ、一つをば重盛が首と名づけ、一つをば清盛が首と懸けられけるが、かくて曉にもなれば、我が方に歸り、衣引きかづきて伏し給ふ。

(義經記卷一)

「毬杖」は彩形、飾つた、杖、形、正、月、の、木、製、の、遊、ん、だ、玉、を、打、つ、て、遊、ぶ、の、具、だ。

幽玄な風韻である。また、能樂といふ一種の樂劇の詞章である性質上、囃子や演技に適應調和するやうに、ひたすら聲調に重きを置いて作られてゐることは、いふまでもあるまい。

ワキ、ワキツレ一聲謡、秋風の音にたぐへて西川や雲も行くなり大江山。ワキ
サシ謡、そもくこれは源の頼光とは我がことなり。さてもこのたび丹
波國大江山の鬼神のこと、占方の言葉にまかせつゝ、頼光保昌に仰せ
つけらる。ワキツレ謡頼光保昌申すやう、たとひ大勢ありとても、人倫な
らぬ化生のもの、いづくを境に攻むべきぞ。ワキ謡、思ふ仔細の候とて、
山伏の姿にいであちて、ワキツレ謡、兜にかはる頭巾を着、ワキ謡、鎧にあ
らぬ篠懸や、ワキツレ謡、兵具に對する笈を負ひ、ワキ謡、その主々は頼光
保昌、ツレ謡、貞光季武綱公時、一人武者謡、また名を得たる一人武者、ワキ
ツレ謡、かれこれ以上五十餘人、ワキ謡、まだ夜のうちに有明の、ワキ、ワキ
ツレ謡、月の都を立出でて、行末問へば西川や、波風立てて白木綿の、御祓
も頼もしや、鬼神なりと大君の、恵みに漏るゝ方あらじ。たゞ分けゆけ

シテは酒呑童子
頼光、ワキは源
及び一人武者
狂言は童子の
侍女は童子の
「サシ」はシテ
一聲の謡を
に論ぶ歌詞を

「一人武者」は
その名不明

これは觀世・多
寶生流の謡
金剛諸曲である

狂言

狂言とは、能
樂に對して、
問答の能、
立入能、
演ぜられ、
つづ入れ、
演ぜられ、
ひびき、
狂言とあ

やあしびきの、大江の山に着きにけり。ワキ謡、急ぎ候ほどに、大江山に
着きて候。いかに誰かある。狂言謡、御前に候。ワキ謡、この處にて童子の
すみかを尋ねて宿をとり候へ。狂言謡、畏まつて候。いかに童子の御座
あるか。シテ謡、童子と呼ぶは、いかなる者ぞ。狂言謡、山伏たちの御入り
候が、一夜の御宿と仰せられ候。シテ謡、何と、山伏たちの一夜のお宿と
候や、恨めしや、桓武天皇に御請け申し、我、比叡の山を出でしより、出家
には手をささじと、固く誓約申せしなり。中門の脇の廊に留め申し候
へ。狂言、しかく。

(謡曲大江山)

謡曲が眞摯嚴肅な樂劇として、かくの如く長足の發達を遂げ
た一方滑稽な古猿樂の面影を傳へて發達したものに狂言があ
る。狂言は能樂の間に演じ、能樂によつて緊張した氣分を緩和す
るもので、能樂が古典的にして悲劇的色彩を帯びてゐるのに對
し、これは現實的にして世相を諷刺した好個の喜劇となつてゐ
る。故に、その題材も俗間から巧に捉へられて、或は臆病で虚飾家

の大名、或は無學淺智な山伏、或はまた狡智に長けた冠者等の面目が、遺憾なく寫し出され、用語も全く當時の口語で、民衆的な氣分が濃厚に感ぜられる。その詞章は地の文がなく、獨語と對話とからのみ成つてをり、仕組は概ね小規模で、すべて單式に仕組まれてゐる。

シテ「遙か遠國の大名、永々在京致すところ、訴訟悉く相かなひ、安堵の御教書頂戴し、あまつさへ御暇までを下され、近日、本國へ罷り下る。この由を申し聞かせ、悦ばせうと存ずる。太郎冠者あるかやい。アド「御前に。シテ「念なう早かつた。汝呼出だす、別のことでない。永々在京致すところ、訴訟思ひのまゝに相かなひ、安堵の御教書を頂戴し、あまつさへお暇まで下され、近日、本國へ罷り下る。このやうなめでたいことはないなあ。アド「内々かやうな儀を待ちましたに、かほどおめでたいことはござらぬ。シテ「めでたいなあ。アド「さやうでござる。シテ「さて在京中、氣を詰めたによつて、ざつと一遊山して立たうと思ふが、何とあら

シテは大名、アドは太郎冠者

これは和泉流狂言である。

舞の本

桃井直詮は源義家から八代の桃井播磨守直常の孫である。

「鎌倉殿」は源頼朝。「アドキ」は述べ懐の意を述べる語り方の一種。

う。アド「御意もなくば、申し上げうと存じてござる。一段とようござりませう。シテ「それならば、どれへいたものであらう。アド「されば、それがようござりませうぞ。シテ「どれがよからうなあ。アド「どれこれと仰せられうより、東山邊は何とでござらう。

（狂言萩大名）

謡曲は能樂の詞章であるが、また幸若舞の詞章に舞の本があった。幸若舞は一に舞舞ともいひ、桃井直詮の創めたもので、直詮の童名を幸若丸といつたから、この名があるといふ。その盛んに行はれたのは、室町時代の末期から江戸時代にかけてであつて、題材は多く「平家物語」や「義經記」「曾我物語」等から取られ、地の文と詞とから成つてゐることは謡曲と同じであるが、その表現は敘事的、散文的で、謡曲の如き劇的要素に乏しい。

文治元年正月十三日に鎌倉殿箱根詣でとぞ聞えける。さる間箱根には、鎌倉殿の御參りとして、大衆衣を用意し、兒の衣裳を結構す。クドキそ

「箱王」は曾我五郎時致の幼名

の中に箱王殿、衣裳のことを嗜^{たし}まで、幼稚で離れし父御のこと、今のやうに思はれて、しのびの涙せきあへず。コトバこしの式部を近づけ、いかに候、式部殿、鎌倉殿の御前へ、我は出仕を申すまじ。それをいかにと申すに、祖父伊東の入道殿、謀叛人なりとて、御咎めのありしこと、世には隠れも候はず、式部殿とぞ申しける。式部この由聞くよりも、^ごも候へ。これほど大衆結構候に、よそながら御見物あれかし、箱王殿とぞ申しける。さらば見物せん。とて、鎌倉殿の御参りを、今や遅しと待ち給ふ。

(舞の本元服曾我)

五 御伽草子

この時代になつて、讀物にもまた、民衆的な傾向の著しいものがあらはれた。それは御伽草子である。御伽草子は、後世の御伽噺の源流ともいふべきもので、一寸法師、物ぐさ太郎、浦島太郎などの物語が題材とされ、その中に佛教や儒教の思想が可なり濃厚

御伽草子

にあらはされてゐるが、筋が通らず、前後矛盾してゐるところが少くなく、文章も冗漫蕪雜にして清新味を缺いてゐる。たゞ、この時代に出でた他の多くの文學と同じやうに、江戸時代の文學の導火線となつてゐるところに興味もあり、また價值もあるものであつて、近世の小説と共通する分子が多いのである。

昔丹波國に浦島といふものはべりしに、その子に浦島太郎と申して、年のよはひ二十四五の男ありけり。あけくれ海のうろくづを取りて父母を養ひけるが、或日のつれづれに釣をせんとて出でにけり。浦々島々入江々々、至らぬ所もなく釣をし、貝を拾ひ、みるめを刈りなどしけるところに、^なぢまが磯といふ所にて、龜を一つ釣上げける。浦島太郎、この龜にいふやう、汝生あるものの中にも、鶴は千年、龜は萬年とて、命久しきものなり。忽ちここにて命を絶たんこと、いたはしければ助くるなり。常にはこの恩を思ひ出だすべし。とて、この龜をもとの海にかへしける。

(御伽草子浦島太郎)

六 隨 筆

徒然草

平安時代の「枕草子」、鎌倉時代の「方丈記」と共に、隨筆文學の絶品として名高いものは、兼好法師の筆に成る「徒然草」である。「徒然草」は全篇二百四十餘段から成り、その中には「枕草子」と同じやうに、自然の風物、人情の曲折をはじめ、作者の見聞したあらゆる事相が、筆にまかせて書きとめられてをり、その中心をなす思想は、佛教の無常觀に立脚したものであるが、趣味性の豊富にして理解力の深い作者は、決してそれに捉はれることなく、無常を説き、悟道を勧める一方では、人間的な悩みにも同情し、王朝の趣味にもあこがれ、現實の慰樂にさへも謳歌の聲を放つてゐるのである。また、老莊の教を參酌加味したところも少くない。そして、かくの如き一見矛盾してゐると見える内容から、却つて深い眞實性が

「栗栖野」は山城國

「かくてもあらはれけるよ」
「中にもかな山のよ」
「住めるものよ」
「の意」

「ともある時」
「はどうかする」との意。
「げに」は「しらく」は「まこと」
「思ひつきぬべし」は「思ひつかせる端緒」
「うになるであらうの意」

感受されることは、誰しも否めないところであらう。文章は絢爛を求めず、奇巧を衒はず、簡潔にして警拔であり、平淡の中に雅趣が溢れてゐる。

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、或山里にたづね入ることはべりしに、遙かなる苔の細道を踏分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ、篋のしづくならでは、つゆおとなふものなし。關伽棚に菊、紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の枝もたわゝになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。
(徒然草)
朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくるへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、なほげに、しく、よき人かなとぞ覺ゆる。疎き人のうちとけたることなどいひたる、またよしと思ひつきぬべし。
(同上)

五山の文學

京都の五山は天龍寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺、鎌倉の五山は建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺、淨土寺、淨宗の寺院である。

七 漢文學と吉利支丹文學

室町時代は、禪宗の大いに興隆した時代であるから、俊才の士が多く五山に集り、その支那に渡る者も次第に數を増して來たが、彼等はかの土にあつて、佛學を修める傍ら、儒學をも研め、また詩文をも學んだので、五山は文學の淵叢となり、戰亂のため一般に文事を顧みる暇のなかつた當時の精神界は、全く禪僧たちによつて支配されたといつても過言でない。そして、かくの如く五山の文學が興つた基を作つたものは、元から來朝した禪僧寧一山であつて、その門下に虎關・夢窓等が出て、更に夢窓の門下に義堂・絶海等が出てた。これ等の禪僧たちの詩文は、殆ど和臭のない純支那風のものであるが、就中、義堂の作は五山文學中の白眉と稱され、その集に「空華集」がある。

題は「小景」

晩際西風急なり 歸舟席半の檣 水村看れどもいまだ到らず 江樹舞ふこと狂ふが如し

〔晩際西風急 歸舟席半檣 水村看未到 江樹舞如狂〕 (空華集)

吉利支丹文學

創作には數種の「ドチリナキリシタン」(聖教要理)等があり、翻譯には「サントス」の御作業(聖徒傳)「コンテムツスムンチ」(捨世錄)「ギヤドベカドル」(退惡錄)等がある。

「伊曾保物語」は「イソツプ」の翻譯である。

なほ、この時代の末期には、南蠻人即ちヨーロッパ人が我が國に渡來し、始めて西歐の文物がもたらされると共に、吉利支丹宗門も傳へられたが、同宗門内においては、傳道教化に資すべき翻譯や創作が盛んに行はれた。そして、それ等は天正年間、活字印刷機が輸入されると、或はローマ字により、或は邦字によつて印刷頒布されたのであつた。その翻譯乃至創作に當つたのは、日本語に通じた外國人宣教師や、學識ある日本人信徒等であつたらしく、翻譯は直譯風のところは少く、語句が十分にこなれてをり、簡明にして、直截である。種類には、教義書、修養書、聖徒傳等があり、別に主として外國人宣教師の日本語學習に資した教外の晝伊曾

保物語「平家物語」「太平記」「和漢朗詠集」等もある。このうち「伊曾保」と「平家」とは、當時の口語をもつて書かれ、その文體は狂言に最もよく似通つてゐる。しかし、これ等の文學は、徳川幕府の吉利支丹宗門禁制によつて、はかなく滅びてしまひ、後世にはあまり影響を及ぼすところがなかつた。

善人の樂しみは、心の淨き證據なり。淨き心をもつに於いては、不斷喜ばしかるべし。淨き心は、數多のことをよく堪忍し、氣に逆ふことの中にても、喜を含むなり。心淨からざる人は、いつも恐ありて騒ぐなり。心に咎むることなくんば、歡喜安閑の樂しみを抱くべし。

(コンテムツスムンヂ)

徳もなうて譽を掲げうずるものは、必ず恥に遇はうず。惡人まぎれて善人の中に交はるといふとも、言語進退に忽ちその惡があらはれて、恥に及うで退かうずることは疑もない。

(吉利支丹版伊曾保物語)

第五章 江戸時代

一 概 観

徳川家康が江戸に幕府を開いてから同慶喜が大政を朝廷に奉還するまで、凡そ二百六十年間を江戸時代といつてゐる。この時代は太平が永く續いて、文化は一般民衆の間に普及し、前古に比のないほど文運の興隆した時代であつたが、そのうち前半は、元祿を中心とする京阪の盛運期であり、後半は文化、文政を中心とする江戸の盛運期であつた。

この時代には、幕府の政策として、士農工商の階級制が行はれてをり、工商は町人と稱され、農と共に武士階級の下にあつたが、太平が續いて、彼等の經濟的勢力が増大して來ると、今まで文化

時代の範圍と文化の中心

時代の特色と文學の傾向

から取残されてゐた彼等の間にも、學問・文藝に携はる者が出て、ここに武士階級の文學に對して、町人階級の文學、即ち町人文學の勃興を見るに至つた。しかも、この新興の町人文學は、何等傳統に捉はれることなく、あらゆる様式を思ひのまゝに創造するこゝとが出来たから、ひたすら支那乃至王朝の文學の摸倣を事として、人事を對象とすることを野卑として却けた武士階級の文學よりも、この時代の特徴を發揮してゐることが、遙かに多い。また、武士道と儒教とは、あたかも室町時代における佛教の如く、江戸時代の精神界を支配したものであつて、町人の間においてすらも、町人としての義理、町人としての修身、齊家は極めて重んぜられたが、かくの如き一般の風潮は、義理と人情との相尅を描いたすぐれた文學を生む一方、強ひて功利的道徳を盛りこんだ淺薄な文學をも流行せしめた。しかし、この時代の文學は、京阪盛運期

においても、江戸盛運期においても、要するに洗煉された繊細な趣味生活を基調とした都會文學であるから、概括的にいへば、享樂的・獵奇的な傾向を著しくもち、粹とか通とかが、文學の上でも大きな勢力を占めてゐたのである。

二 浮世草子と黄表紙・讀本類

室町時代の御伽草子が、江戸時代に入つて一步を進め、假名草子となつてあらはれた。假名草子は概ね娛樂と教訓とを兼ねた雑話を假名書きにしたもので、如儻子の可笑記、山岡元隣の他、我身の上、鈴木正三の因果物語、二人比丘尼、淺井了意の御伽婢子、浮世物語等が知られてゐる。これ等は、寛永から延寶頃にかけて盛んに行はれ、古文學の摸倣擬作でなければ、支那文學の翻譯であるが、その中に西洋文學の翻譯である伊曾保物語が混つて出で

てゐるのは、注目に値する。これは、室町時代に出でた吉利支丹版の「伊曾保物語」とは、全然系統を異にする翻譯で、譯者は不明である。

「牡丹燈籠」の冒頭である。

年ごとの七月十五日より二十四日までには聖靈の棚を飾り、家々これを祭る。またいろ／＼の燈籠を作りて、或は祭の棚にともし、或は町家の軒にともし、また聖靈の塚に送りて、石塔の前にともす。その燈籠の飾物、或は花鳥、或は草木、さまざま、殊勝らしく作りなして、その中に燈火ともして夜もすがら置く。これを見る人、道も去りあへず、またその間に踊子どもの集り、聲よき音頭に頌歌出させ、振よく踊ること、都の町々上下皆かくの如し。

(御伽婢子)

しかし、假名草子は、元祿の浮世草子に展開してゆく江戸時代の小説の、いはば序曲に過ぎなかつた。元祿時代は、元和偃武からまさに七十年、世は太平に酔うて、文化も大いに發達したが、當時は町人の擡頭期であつたから、特に町人文學が空前の盛觀を呈

浮世草子

した。そして、當時、富の中心であつた大阪が、おのづからこの町人文學の中心となつたが、浮世草子は、その大阪に發生した町人文學の粹であつた。浮世草子とは、浮世即ち現世のことを記した書の意であつて、特に享樂を主とした現世謳歌的内容をもち、井原西鶴の手によつて始めて作られたものである。西鶴はもと俳諧師であつたから、その俳諧で修得した鋭利奇警な觀察眼と、法格に拘泥しない清新潑刺たる筆とをもつて、浮世草子の中に、或は町人の爛れた享樂生活や金即心の心事を、或は武士の義理一片に執した變態士道を活寫し、元祿の時世粧は、ここに殘る限なく暴露されてゐる。その作には、軟派物に「一代男」「五人女」等があり、町人物に「日本永代藏」「世間胸算用」等、また武家物に「武道傳來記」「武家義理物語」等がある。なほ、西鶴以後の浮世草子の作者には、北條團水月「尋堂」等が出でたが、單に西鶴の後塵を逐うたまでであつ

た。

「小桶・俵をこ
しらへ」の下
れといふ語
を補つて解す
る
「魂祭の棚を
崩して」の語
に「家々」の
を補つて解す
る
「枸杞・五加
木」は共に薬
用などになる
「風車」は有毒
の蔓性植物
「海月桶」は海
月を漬けてお
く桶

八文字屋本

ここに越前國敦賀の大港に年越屋の何某とて有徳人、所に久しく住
慣れて、味噌醬油を造り、初は纒かなる商人なるが、次第に家榮えける。
世の萬づに賢く、分限になるそもくは、山家へ毎日賣りぬる味噌を、
いづれにても小桶俵をこしらへ、この費限りなし。時にこの親仁、工夫
仕出して、七月魂祭の棚を崩して、桃柿瀨々を流る、川岸に行きて、す
たれる蓮の葉を拾ひ集め、一年中の小賣味噌を包めり。この利發、世上
に見習ひ、これに包まぬ國もなし。程なく大屋敷を買求め、その庭木に
も、花咲き實をながめ、生垣も枸杞五加木を茂らせ、萩は根引に、風車は
十八角豆に植ゑかへ、同じ蔓にも取りえのあるものを好めり。海月桶
のすたるにも、蓼穂を植ゑ、目にかゝるほどのこと、一つも愚かなるし
わざなし。
(日本永代藏卷六)

浮世草子を摸して、やゝ作風を異にしてあるものに八文字屋
本がある。初め京都の書肆八文字屋から出版されたので、この名

八文字屋自笑
は八文字屋の
主人である。

赤本・黒本・青
本と黄表紙

があり、元祿の末から享保寶曆頃にかけて續出し、その作者には
江島其磧、八文字屋自笑、多田南嶺等があつた。就中、其磧の「世間子
息氣質」世間娘氣質等は、明和・安永頃に流行を極めた氣質物の元
祖である。しかし、八文字屋本には、西鶴の浮世草子に見る如き端
的な尖鋭味がなく、たゞ穏和な説明に墮し、人物の性格にも類型
的なものが多い。

かくの如く江戸時代も、その中期頃までは、文化の中心はなほ
京阪を去らなかつたけれども、何といつても政治の中心が江戸
にあつたのであるから、文化の中心もまた江戸に遷つて行くの
は自然の理であつた。殊に八代將軍吉宗が實學を奨励してから
は、江戸の文化は大いに向上し、遂に明和・安永の交に文運の東遷
を見るに至つたのである。さて、文運の東遷前から江戸にあらは
れ、東遷後榮えた純文學は赤本・黒本・青本・黄表紙等であつた。これ

卷に漂ひ、また街學的な分子も多く、比較的高級な讀者を對象として書かれたものであることが感知される。代表的作者には、前に上田秋成あきなりがあり、後に山東京傳・曲亭馬琴等がある。秋成の「雨月物語」は神祕玄怪の世界をまざく、と展開させて、人をして鬼氣迫る思あらしめ、京傳の「櫻姫全傳曙草紙」むかしばなし「昔語稻妻表紙」等は場面の變化に富み、人情味の豊かなものがあつて、それ／＼特異の氣分を湛へてゐるが、何といつても讀本界の重鎮は馬琴で、彼が瑰麗雄偉な筆を揮つた「椿説弓張月」ちんせつ「南總里見八犬傳」等は、その構想の雄大にして、場面の展開の變幻極まりないことにおいて、驚異に値するものがある。しかし、あまりに勸善懲惡主義に執し過ぎて、人物の性格が善惡共に類型的となり、また必要以上に考證穿鑿に耽り過ぎて、作の興趣を殺いだ憾みがないでもない。

芳流閣上の格闘の條である。

さればまた、犬飼見八けんべちのぶみち信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎つきまろひとやに繋

「坂東太郎」は利根川の異名。
「目柴翳す」は身を蔽ひかくすの意。目柴は鳥獸を射るために柴などを折つて身を隠すものをいふ。

合卷

れし、禍は今恩赦の福、我が縛なばの索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃のぶを搦めよとて、なまじひに擇み出だされつ他の憂を自の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、推辭いなみて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、かの樓閣は三層なり、その二層にせうなる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下あしもと遠く、雲近く、照る日烈しく、堪難たがへき、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸かむしの、燄熱ほてりをわたる敷瓦は、凸凹こぼ隙なく、波濤なみに似て、下には大河滔々たる、ここ生死いしにの海に朝、潮洄うらは名に負ふ坂東太郎、水際のみづは小舟楫緒絶えて、進退既に谷まりし、敵にすればいかでわれ、繋なぎとめんと、錨いかりの、樹傳じゆでんふ如くさら／＼と、登りはてたる三層の、屋背やせには目柴まぶし翳すよしもなく、透かたみを窺ひつゝ、疾視はげまあうて立つたる形勢、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇こおろちのねらふに似たりけり。

(南總里見八犬傳第四輯卷一)

長篇物の讀本が大いに歓迎された讀書界の風潮は、從來、輕い諷刺諧謔をのみ旨としてゐた黄表紙の内容をも變化させ、遂に

赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻を總稱して草雙紙といふ。種彦は合巻を歌舞伎化し、挿畫の人物にも役者の似顔を用ひた。

滑稽本と人情本

小冊子では間に合はなくなつたところから、これを合冊にした合巻がくわんが出来るやうになつた。合巻は、いはば挿畫の豊富な讀本であるが、その内容は、讀本に比すれば遙かに通俗的なもので、低級な讀者を對象として書かれてゐる。作者では柳亭種彦が最も有名で、その作にせむらさき修紫田舎源氏は、大いにもてはやされた。

滑稽本は、洒落本の題材の範圍を擴大した如きもので、滑稽と洒落とに終始する、罪のない笑の文學である。その先驅と認めるべきものは、この時代の初期、寛永年間に出た安樂庵策傳の笑話集「醒睡笑」であるが、後期に入ると、洒落本を導火線として、滑稽文學が續々とあらはれた。その代表的なものとしては、享和二年に初篇が出た十返舎一九の「東海道中膝栗毛」と、文化六年に第一篇が出た式亭三馬の「譚話浮世風呂」とを擧げることが出来る。なほ、同じく洒落本を導火線としてあらはれたものに爲永春

小田原の條である。

水の人情本があるが、口語をそのまま、用ひた會話に生彩がある外、文學的價値の頗る乏しいものである。

北「コレ／＼女中、煙草盆に火を入れて来てくんな。彌次「オヤ、手前もとんだことをいふもんだ。北「なぜ／＼。彌次「煙草盆へ火を入れたら焦げてしまはア。煙草盆の中にある火入のうちへ火を入れて来いといふもんだ。北「エ、お前も言葉咎めをするもんだ。それぢやア日の短い時にやア、煙草をのまずにぬにやアならねえ。彌次「時に腹がきた山だ。今飯をたく様子だ。埒のあかねえ。北「コレ彌次さん、おいらよりやア、お前文盲なもんだ。彌次「なぜ。北「飯をたいたら粥になつてしまふはな。米を焚くといへばいいに。彌次「ばかアぬかせ。ハ、ハ。ト、このうち、女、煙草盆を持つて来る。北「モシ姉さん。湯が沸いたらへえりやせう。彌次「ソリヤ人のことをいふ汝が、なんにも知らねえな。湯が沸いたら熱くてはいられるものか。それも水が湯に沸いたらへえりやせうとぬかしをれ。

(東海道中膝栗毛初篇)

古浄瑠璃

小野お通は織田信長の侍女ともいわれる。「浄瑠璃物語」にはまた「浄瑠璃十二段草子」の名もある。

三 浄瑠璃と脚本

浄瑠璃の起原は明らかに知ることが出来ないけれども、凡そ室町時代末期から起つたものらしく、小野お通の作といはれる「浄瑠璃物語」が最古の作で、牛若丸が奥州へ下る途中、三河國矢矧の長者の娘浄瑠璃姫に會ふ説話を十二段に綴つたものである。そして、初には盲法師などがこれに節をつけ、單に扇拍子で語つてゐたのであつたが、永祿年間、琉球から三味線の渡來があつて、後、慶長の頃から三味線に合はせて語り、また後には操人形に掛けることになり、ここに始めて浄瑠璃・三味線・操人形の三者が相提携した一種の樂劇が完成したのであつた。この浄瑠璃も、謡曲と同じく地の文と獨語・對話とから成り、語物としての性質上、聲調に重きを置かれてゐることはいふまでもないが、しかし、初

金平(公平)は坂田公時の子で、金平浄瑠璃はこの金平を主人公としてある。

近松の浄瑠璃

當時、興行は高かつた。代物は、作られた。代物は、時代物。代物は、世話物。代物は、多。

期のものは、御伽草子風の極めて單純なもので、萬治・寛文の頃、江戸人の好尚に投じて流行した金平浄瑠璃の如きも、たゞ殺伐にして荒唐無稽な豪勇譚を脚色したものに過ぎなかつた。

然るに貞享の頃、大阪に竹本義太夫が出て、従來行はれてゐた浄瑠璃節の諸流を綜合し、その長短を取捨折衷して、新に義太夫節を創めた。そして、浄瑠璃作者として夙くその名の聞えてゐた近松門左衛門が、これと提携して新作を出すに及んで、浄瑠璃は一期を劃し、爾來急激な發達を遂げて、優秀な戯曲として不朽の價值を生ずるに至つた。實に近松の浄瑠璃は、西鶴の浮世草子と共に大阪に發生し、絢爛たる元祿文學の華となつたもので、時代物と世話物とに分れてゐるが、時代物が古浄瑠璃の傳統上に立つものであるのに反し、世話物は全く近松の獨創に成り、傑作もまたこの方に多い。即ち世話物は、當時の市井の卑近な出來事

に取材して、寛容公平な人生觀をもつてこれを醇化し詩化し、更に義理と人情との葛藤を配して、人生の窮極の目的は畢竟安心立命にあることを暗示してゐるのであつて、温かい愛の藝術家近松の風格は、ここに残る限なくあらはれてゐる。しかも、結構脚色は巧妙を極め、描寫も精緻で、世態人情の機微を穿ち、詞藻が豊麗であると共に、才氣もまた横溢し、奔放自在の筆を揮つた天來の詩曲は、まさに古今獨歩の特技を示してゐる。その作には、時代物に「出世景清」「國性爺合戰」「曾我會稽山」等があり、また世話物に「冥途の飛脚」「博多小女郎浪枕」「天の網島」「女殺油地獄」等がある。

「なう／＼姫宮様。お身には怪我もなかつたか。舟はそのまゝそこに。」と、よろぼひ寄つて、「この體では、船中のお供はならぬ。また敵が寄せ来れば、もうどうもかなはぬ。潮にまかせ、いづくまでも落ち給へ。沖へ舟の出るまでは、この女が陸にひかへた。敵何萬騎寄せたりとも、命限り

明の大司馬吳三桂の妻である、思柳歌君が、皇女である梅檀の妹である梅檀の條である。

近松以後の淨瑠璃

腕限り。さりながら主従二度の對面は、御縁と命ばかりぞや。随分御無事で、御無事で。南無諸天諸佛、別して八大龍神、萬乗の君の姫宮の御舟を守護し給へや。」と、船梁取つて押出だせば、折しも引汐の名残を何と梅檀女、涙しをるゝ汐風に、龍神納受の沖つ風、沖を遙かに流れ行く、あら心やすや嬉しや。よしこの上は生きのびても我が身一つ、死んでも誰を友千鳥。生死の海は渡れども、夫の行方、子の行方、君が行方はおぼつか波の、うき世の海を越えかねし、渡りかねしといはばいへ、この一心のはやて舟。仁義の櫓、武勇の楫は、折つても折れぬ沖つ波、寄せくる関の聲か。とて、劍にすがつてたぢ／＼。よろ／＼。よろぼひ寄る方、磯山おろし松の風、亂れし髪を搔上げて、あたりを睨んで立つたりし、和漢女の手本紙筆にも寫し傳へけり。

(國性爺合戰第二)

近松と同時代に活躍した淨瑠璃作者には、「鎌倉三代記」や「八百屋お七」「二つ腹帯」等を作つた紀海音があるが、その後、淨瑠璃界はますます盛んになつて、竹田出雲、近松半二等が輩出し、いづれも

「手習鑑」以下
人の合作であ
る。

歌舞伎の脚本

この集團舞踊
を歌舞伎踊と
いつた。

才藻の點では近松に及ばないけれども、趣向の變化に富み、舞臺
効果の多い作を出した。即ち出雲には、菅原傳授手習鑑、義經千本
櫻、假名手本忠臣藏等の作があり、半二には、本朝二十四孝、傾城阿
波鳴門、妹脊山、婦女庭訓等の作がある。

しかし、文運の東遷後は、淨瑠璃はあまり振はず、これに代つて
歌舞伎が發達した。歌舞伎は、戲謔の意の「かぶく」といふ語を體言
化したもので、慶長年間、出雲の巫女お國が創めたといはれ、最初
は女子ばかりの集團舞踊であつたが、それが男女混淆となり、後
には女子の俳優の嚴禁された結果、男子の女形が發達する一方、
物真似を交へるやうになり、追々演劇の體を具へるに至つたも
のである。けれども、淨瑠璃の盛んに行はれてゐる間は、歌舞伎の
脚本には見るべきものはなかつたが、淨瑠璃が衰へるにつれて、
脚本のすぐれたものが漸くあらはれて來た。寶曆から安永頃の

四世南北は文
化、文政期、默
阿彌は天保か
ら明治にかけ
て活躍した。

「仕出し」は幕
開きに狂言の
本筋と關係な
くて舞臺にい
ふ人物をいふ。

作者である並木正三の「三十石燈始」その門下である並木五瓶の
「金門五山桐」等がそれである。しかし、これ等は京阪の作者の手に
成るものであるが、文化、文政頃に七代目市川團十郎が出て、以
來は、歌舞伎は江戸に榮え、名優の輩出、舞臺機構の進歩につれ、一
大民衆娛樂として發達し、民衆藝術の集大成となり、江戸にも多
くの脚本作者が出た。即ちこの前後に江戸で活躍した作者は
四世鶴屋南北、古河默阿彌等、前者には、東海道四谷怪談等の作
があり、後者には、三人吉三、村井長庵等の作がある。

造物一面の黒幕、真中に渡津場の小屋、橋懸り松原、高札立てあり、砂
舞臺に草井戸、在郷唄にて幕ひらく、ト仕出し三人出る。

百姓しんどい、休めく。仕出し〇何ぢややら、ようく。ここは源八の渡
し、もう今から休んで、どうなるもので。△それくまちつと歩め歩
め。百なんぢや、高札が立つてあるは。△ドレく。ト讀む。〇「一、淀

川筋水早く落ち候故舟にてのぼる工夫致すものあるにおいては、重罪たりとも、その咎を許し、褒美は望次第たるべきものなり。

(三十石燈始第二幕目)

四 和歌・狂歌と謠物

初期の歌壇

當時、堂上家の歌人には中光院通勝・鳥丸等があつた

室町時代において沈滞し、連歌にその勢力を奪はれた和歌は、辛うじて細川幽齋によつて、その命脈を繋がれた。幽齋は二條家の正系を承継ぎ、これを堂上家や武士の間に傳へたが、また、その門下である松永貞徳によつて地下にも傳はつた。しかし、當時の歌風は大體において傳統の繼承であり、たゞ纔かに木下長嘯子の歌に傳統を破らうとする曙光がほの見えたに過ぎなかつた。夕されば雲吹きみだる山風に一聲すぐく雁なきわたる

(木下長嘯子)

元祿期の歌壇

然るに元祿時代に入ると、時代の趨勢に促されて、革新運動が起され、歌壇も面目を一新するに至つたが、その基調をなしてゐるのは、和歌の自由檢討と民衆化とであつた。そして、この潮流に棹さした歌人は、下河邊長流・僧契沖・戸田茂睡等である。

せば布の胸あひがたきすきまより身にしむけふの秋の初風

(下河邊長流)

初瀬のや里のうなるに宿とへば霞める梅の立枝をぞさす

(僧契沖)

國學興隆期の歌壇

民衆化して自由檢討の域に入つた歌壇は、あたかも國學が勃興し、復古思想が盛んになつた機運に際會したので、活氣が横溢し、歌人が雲の如く輩出して、多くの分流を生じ、それ／＼特色ある歌を詠んだが、そのうち主なもの、雄渾蒼古な風調を鼓吹する賀茂眞淵・楫取魚彦・田安宗武等の萬葉派「古今」「新古今」を折衷し

「あしほ」(葦穂)も常陸國にある山。

て穩健清雅な風調を持つる加藤千蔭村田春海等の江戸派洗煉の極致を理想とする荷田在滿本居宣長等の新古今派眞情を率直に歌ふことを旨とし技巧を極力排した小澤蘆庵の一派などである。

をつくばも遠つあしほも霞むなりねこし山こし春や來ぬらん

(賀茂眞淵)

墨田川蓑きて下す筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ

(加藤千蔭)

網代木にいさよふ波も立ちこめて霧におとする宇治の川づら

(荷田在滿)

粟田山ふもとの粟生いろづきて薄霧なびき秋風ぞ吹く

(小澤蘆庵)

これ等の諸歌人に續いてあらはれた香川景樹は蘆庵の説を祖述して眞情を率直に歌ふべきことを唱へると同時に更に歌

桂園派と幕末の歌壇

景樹は「歌は調ぶるものなり、ことわるものにあらず」といつた。

意と聲調とを合致せしめるべきことを強調し、桂園派を起して歌壇を風靡し、その門下から熊谷直好・木下幸文・八田知紀等の名手を出した。なほこの外、越後の僧良寛、福井の橘曙覧、備中の平賀元義、福岡の大隈言道、また女流の野村望東尼、太田垣蓮月等、すぐれた歌人が續々あらはれて、幕末の歌壇を賑はした。

富士のねを木の間くにかへりみて松のかけふむ浮島が原

(香川景樹)

月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに

(僧良寛)

親泣けば子さへ泣くなり世の中のせんすべなさも何も知らずて

(大隈言道)

おり立ちて朝菜洗へば賀茂川の岸の柳にうぐひすの鳴く

(太田垣蓮月)

和歌の形式を藉りて滑稽諧謔を弄するものに狂歌がある。狂

狂歌

狂歌に對し、漢詩の形式を藉りて滑稽諧謔を弄するも、これを狂詩といひ、この方面でも四方赤良(天田蜀山)がすぐれてゐた。

歌の淵源は遠く「萬葉集」まで溯ることが出来るけれども、それが文學の一形式として盛んに行はれるやうになつたのは、安永・天明の頃からで、その中には、古來の和歌の想をもぢつて、これを滑稽化したものもあれば、また時勢を諷刺した皮肉なものもあるが、いづれも一般の輕佻な風潮を反映して、機智縱横、輕妙洒脱を極めてゐる。作者には鯛屋貞柳、唐衣橋洲、四方赤良、朱樂菅、江鹿都部眞顔、宿屋飯盛等がある。

菜もなき膳にあはれは知られけり 鳴焼茄子の秋の夕ぐれ

(唐衣橋洲)

さわらびが握拳を振りあげて山の横つらはる風ぞふく

(四方赤良)

俗謡

三味線の渡來は、謠物の發達をも大いに促し、江戸時代には、小唄をはじめ、いろ／＼の俗謡が流行したが、それ等を集めたもの

も「隆達小唄集」「山家鳥蟲歌」「松の葉」「松の落葉」等數多く出でた。

梅は匂よ木立はいらぬ 人は心よ姿はいらぬ (隆達小唄集)

めでた／＼の若松さまよ 枝も榮える葉も茂る (山家鳥蟲歌)

名所さま／＼多けれど 吹上の濱は和歌の浦 さあ天神玉津島

布引の松山いく千代々々と 和歌山の松 お詣りあれの紀三井寺

(松の葉)

五 俳諧と川柳

貞門の俳諧は、貞門の俳諧は、また古風ともいはれる。

山崎宗鑑、荒木田守武等の創めた俳諧連歌は、江戸時代の初に松永貞徳が出でてから、非常な勢で興隆した。前述の如く貞徳は、二條派の和歌を細川幽齋に學んだのであるが、彼の本領はむしろ俳諧連歌の方にあり、歌學から得たその豊富な古文學上の知識をもつて、一旦破棄されてゐた俳諧連歌の法式を新に作り、用

談林の俳諧
談林はまた檀
林とも書く。

西鶴は住吉
社頭で一書
に二萬三千
百句を作つ
といふ。

語の上にかしみを求めて、一派を開いた。その門に集つた松江重頼・北村季吟等を貞門の俳人といふ。なほ、この頃から單に俳諧といつて、俳諧連歌を指すこととなつた。鳳凰も出でよのどけきとりの年一僕とぼく／＼ありく花見かなしかし、貞門の俳諧は、要するに幼稚な駄洒落に過ぎず、しかも新に作られた法式は、その煩瑣なことにおいて、結局、以前の連歌の法式と大差がなかつたから、ここに再び俳諧を法式から解放する運動が起された。そして、この運動に主として當つたのは西山宗因で、彼は輕妙な滑稽と放膽な句法とによる一新派を樹立し、これを談林派と稱した。かくて、宗因の門には、後に浮世草子作者となつた井原西鶴をはじめ多くの俳人が雲集し、貞門の俳諧を壓して、延寶の末頃には、俳壇は談林の風靡するところとなつた。

花むしろ一見せばやと存じ候
長持に春ぞくれゆく更衣

宗因
西鶴

蕉風の俳諧

鬼貫は伊丹派
を起した。な
その句は、な
さんと今日は
を吹く石の塵
を如くきも
あふある。

蕉風はまた正
風とも書く。

かくの如く隆盛を極めた談林の俳諧も、その末流になると、徒に佞屈難解で、獨りよがりの謎めいたものになり、纔かに小西來山・上島鬼貫の二人が出て、飄逸淡泊な俳風を起したけれども、俳壇を革新するだけの力はなかつた。この時に當つてあらはれたのが松尾芭蕉である。芭蕉は初め北村季吟の門に入り、次いで談林に遊んだが、そのいづれにも満足せず、自然を諦觀し、禪に參じて、遂に独自の俳境を開き、貞門・談林の徒が遊戲視した俳諧を根柢から革めて、眞摯にして幽寂高雅な俳諧道を樹立した。これを蕉風といひ、かくして始めて俳諧は詩歌と同格となつたのであるが、芭蕉は殆どその一生を旅に送り、天地自然と同化するこ

とをもつて念願としてゐたので、蕉風の根本は風雅にあつたといはなければならぬ。門下には、輕妙潤達な句を作つた榎本其角、溫雅靜平な風を持した服部嵐雪をはじめ、向井去來、内藤丈草、各務支考、森川許六等、俊秀な人士が多く、それ／＼特色を發揮して、一世の視聽を集め、俳諧の絶頂期を形づくつた。その集には、『冬の日』、『曠野』、『ひさご』、『猿蓑』、『炭俵』、『續猿蓑』等がある。

梅が香にのつと日の出る山路かな

「冬の日」以下を總稱して七部集といふが、「續猿蓑」は芭蕉の歿後に出版されたものである。野坡は志田氏。

芭蕉 野坡

ところ／＼に雉子の啼きたつ

家普請を春の手すきに取りつきて

上のたよりにあがる米の直

宵のうちはらくとせし月の雲

藪ごし話す秋のさびしき

芭蕉 野坡 同 蕉 同 坡

(下略) (炭俵上巻)

以下發句。

古池や蛙飛びこむ水の音

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春

はぜ釣や水村山郭酒旗の風

鉢たゞき來ぬ夜となれば臙なり

水底を見て來た顔の小鴨かな

牛叱る聲に鳴立つ夕べかな

涼風や青田の上の雲の影

芭蕉 其角 嵐雪 去來 丈草 支考 許六

天明の俳壇

其角の江戸座、嵐雪の美濃派、支考の芭蕉派、後出た蕉主なる分派であるが、このうち美濃派の流統を引いた(明和)の人(安永頃)が、加賀の俳壇に、(明和)の人(安永頃)が、

芭蕉の門下は、芭蕉が生きてゐる間こそ、統制されてゐたが、一朝その死にあふと、互に異を立てて争ひ、風調も次第に墮落した。かく芭蕉の精神が失はれて來ると、反動の機運が漸く熟し、まづ明和の頃に炭太祇が出て、續いて安永・天明の交に與謝蕪村があらはれて、俳壇に新調がもたらされた。太祇は主として人事を吟じて、洒脫な趣を見せたのであつたが、天明調を創めた蕪村は、自

燕村は畫家としてみてもすぐれた。

「ふらこ」はぶらんこ。

然人事を客觀的に寫生し、これに優美華麗な畫趣を取入れて、印象の頗る鮮明な句を作り、その門からは高井几董が出た。なほ當時、燕村と共に名を知られた俳人には、大島蓼太、三浦栲良、加藤曉臺、高桑闌更、加舎白雄等があつた。

ふらこゝの會釋こぼるゝや高みより

太 祇

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

燕 村

やはらかに人分けゆくや勝角力

几 董

更くる夜や炭もて炭をくたく音

蓼 太

天明以後の俳壇

天明に新調が出て後、俳諧は再び衰へて、清新の氣を失ひ、ただ文化・文政頃、信濃に小林一茶があらはれて、飄逸な趣のうち、切實な人間味を盛つた句を作つたのが注意されるくらゐのものであつた。

梟よのほゝんどころか年の暮

一 茶

俳文

「甲子吟行」は「野ざらし」紀行ともいひ、「卯辰紀行」は「芳野紀行」ともいふ。支考に「本朝文鑑」許六に「風俗文選」の俳文の編者が

俳諧獨得の觀察と表現手法とを散文に取入れたものが俳文である。そして、この俳文もまた芭蕉の手によつて大成されたのであつて、旅に親しんだ彼は、俳文によつて「甲子吟行」「卯辰紀行」奥の細道等、多くの紀行を書き、そのいづれにも閑寂の趣が漲つてゐるが、その門下の支考、許六等もまた俳文にすぐれてゐた。後、天明期になつては、横井也有が最も著名で、その文集「鶉衣」は、やゝ遊戯に流れてはゐるが、和漢の故事成句を引用して、繊細巧緻を極め、圓轉滑脱の妙味がある。

鶉といふものの味はひ、ことにすぐれたれども、崑山のもとに玉を礫にするとか、多きが故に賤しまる。たとへ、骸は田島のコやしとなるとも、頭は門を守りて、天下の鬼を防ぐ。その功鰐鯨も及ぶべからず。

(鶉衣)

狂文

「百魚譜」の一節。「崑山」は崑崙山の略で、名玉を産する。

俳諧師の間に俳文が作られた如く、狂歌師の間には狂文が作

川柳

「軽いことか
な、草庵の
車から出す
基盤を附句
といふ。」

「誹風柳多留」
は、川柳の生
前に二十四篇
まで出たが、
その後、百六
十七篇まで
刊された。

られた。狂文が卑俗な滑稽と諧謔と諷刺と洒落とを主としたものであることは、全く狂歌と變らず、その遊戯的な點においては、也有の俳文などと共通するところが少くない。

狂歌・狂文を流行せしめた寶曆・明和頃の江戸の風潮は、またここに川柳の流行をも招致した。川柳は、俳諧の前句附から出たものである。前句附とは、たとへば「軽いことかな」といふ句に、「草庵の文庫から出す紙碁盤」と附ける如きをいふので、これは元祿の「たから船」に見えてゐるものであるが、その後、次第にこれが盛んに行はれるやうになるにつれ、附句だけで、獨立した意味をもつものが多くなつて來た。そして、明和二年に吳陵軒可有が、當時、前句附の點者として最も名高かつた柄井川柳の點した前句附のうち、獨立して意味の通ずる附句を集めて、「誹風柳多留」初篇を出したが、後には附句は完全に前句を離れて、獨立した一つの

文學となり、遂に川柳の點した前句附、即ち川柳點が、この文學形式の總名となるに至つた。この川柳は、最も銳角的にして、最も皮肉な文學であつて、その滑稽突梯は、人の頤を解かしめると同時に、その辛辣な諷刺は、世態・人情の弱點・缺陷を衝いて餘すところがない。

いいところへ來たと背高つかはれる

迷ひ子の親はしやがれて禮をいひ

渡守ひと棹戻す知つた人

大王は笏を吞まらず御口つき

清盛の醫者は裸で脈をとり

(誹風柳多留)

隨筆

「大王」は閻魔大王

六 隨筆と紀行

江戸幕府を開いた徳川家康は、兵馬倥傯の間に天下を得たの

益軒の「十訓」、白石の「讀史餘論」、折焚柴の「談叢」、常山の「常山紀談」等、賀茂真淵の「賀茂翁家集」、千蔭の「うまげら花集」、信の「花月草紙」等、有名

であるけれども、學問に興味をもち、しばしば各方面の學者を招いて、知識を廣め、また治道の上から、一般にも學問を奨励し、その後も綱吉・吉宗の如き學問好きの將軍が出たから、江戸時代には、すぐれた學者が踵を接してあらはれ、學界もまた空前の盛觀を呈した。その中には、貝原益軒・新井白石・室鳩巢・湯淺常山の如く、儒學者にして國文をよくし、和漢混淆文をもつて隨筆乃至史論風の書を著したのものもあるが、國學者にも賀茂真淵・本居宣長等、文才に富んだものが出で、宣長と同じく眞淵の門下であつた加藤千蔭・村田春海等の如きは、學者としてよりも、むしろ文章家として傑出してゐた。そして、彼等國學者の手に成つた作は、すべて王朝時代の國文を標準とした、優柔流麗にして蒼古典雅な趣致を帯びた隨筆小品で、雅文または擬古文と呼ばれ、その後も伴蒿蹊・清水濱臣・松平定信・中島廣足・藤井高尙等があらはれて、この方

面にすぐれた作品を残した。

花はさくら。櫻は山櫻の葉あかく照りて細きがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、またたぐふべきものもなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて、花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大方山櫻といふ中にも、しなくのありて、こまかに見れば、一木ごとにいさゝかかはれるところありて、またく同じきはなきやうなり。また今の世に、桐がやつ・八重一重などいふも、やうかはりて、いとめでたし。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何も青やかに茂りたるこなたに咲けるは、色はえて、ことに見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、同じ花とも覺えぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

(玉かつま巻上)

前述の松尾芭蕉の俳文、甲子吟行「卯辰紀行」奥の細道等も紀行であるが、なほ、この時代の紀行の有名なものには、賀茂真淵の「岡部日記」をはじめ、本居宣長の「菅笠日記」、松平定信の「關の秋風」、橘南

「花のさだめ」の一節。

「桐がやつ」はもと鎌倉の桐が谷から出た櫻の一種で、「八重一重」はその異名である。

紀行

谿の「東遊記」「西遊記」等がある。

七 漢文學と國學

漢文學

室町時代に五山の禪僧等によつて維持された漢詩・漢文は、江戸時代に入り、儒學が隆盛になつて來るにつれ、これをよくするものが輩出し、非常な流行を來した。就中、慶長頃の林羅山、享保頃の石川丈山、寛政頃の柴野栗山、菅茶山、文化・文政頃の梁川星巖、頼山陽、幕末の佐藤一齋、齋藤拙堂等は名家で、これ等の人々の詩文集は、いづれも大いに愛讀されたが、特に頼山陽が、武家を中心として、源平以降の歴史を敘し、これに史論を加へた「日本外史」は、徳川光圀が學者を集めて編せしめた「大日本史」と共に、勤王論を鼓舞する上に與つて力が多かつた。

今來古往跡茫茫 石馬聲なく抔土荒る 春は櫻花に入りて満山白

題は「芳野懷古」

く 南朝の天子御魂香ばし

今來古往跡茫茫 石馬無聲抔土荒 春入櫻花満山白 南朝天子御魂香

(梁川星巖)

外史氏曰く、余しばしば攝播の間を往來し、いはゆる櫻井驛といふものを訪ひ、これを山崎路に得たり。一小村のみ。過ぐる者或はその驛址たるを省せず。蓋し足利・織豊數氏を経て、世故變移し、道里驛程、隨ひて輒ち改りしのみ。余ここに於いて、低回して去ること能はず。顧みて金剛山の雲際に巖立せるを望み、公が義を擧げし秋、及びその子孫據りて以て王室を扞護せしを想見す。公が行在に詣り、天子に對ふるを觀るに、曰く、「臣にして未だ死せずんば、賊の滅びざるを患ひたまはざれ。」と。それ一兵衛尉を以てして、しかも居然として天下の重きを以て、みづから任ず。豈値遇に感激し、身を以て國に許せるにあらずや。故によく赤手を以て江河を障へ、天日を既墜に回せり。何ぞその壯なるや。

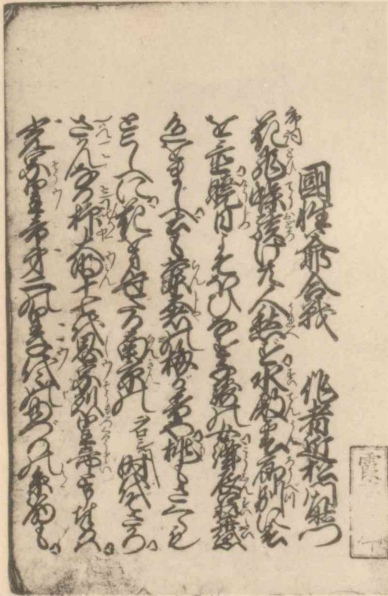
(外史氏曰く、余數往來攝播間、訪所謂櫻井驛者、得之山崎路。一小村耳。過者

國學
季吟の著「源
抄」物語湖
氏「枕草子」
春曙の著「僧契
沖の著「萬葉
集」代「萬葉
淵」の著「萬葉
考」長「萬葉
宣」の著「萬葉
事」記「萬葉
櫛」等「萬葉
氏」等「萬葉
なほある
が我が國
の書を集
刻した一
類從した
惠界に與
へた恩學

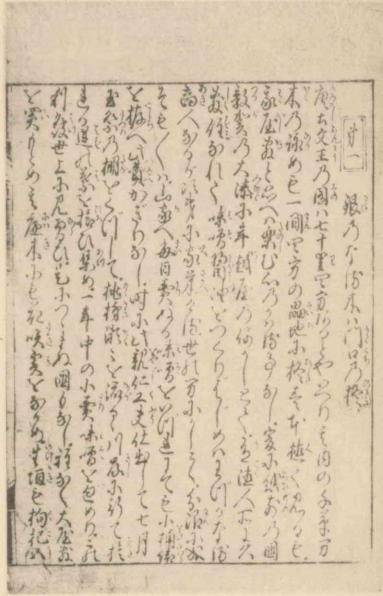
或不省其爲驛址。蓋經足利、織豐數氏、世故變移、道里驛程、隨輒改耳。余於是低回不能去。願望金剛山巖、立雲際、想見公舉義之秋、及其子孫據以扞護王室也。觀公詣行在對天子、曰：臣而未死、賊不患不滅。夫以一兵衛尉而居然以天下之重自任。豈非感激值遇、以身許國哉。故能以赤手障江河、回天日於既墜、何其壯也。

(日本外史)

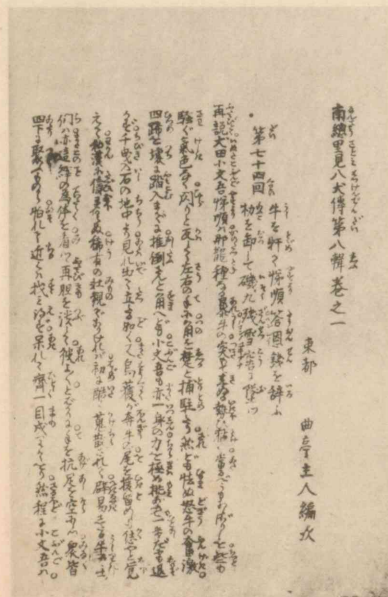
漢文學が盛んになつて、儒學者が専ら支那の孔孟の道を講ずるのに對抗し、我が國の古道を闡明しようとして起つたのは、即ち國學者であつた。夙く元祿期以前に北村季吟が出て國文學の註釋に當つたが、元祿期には下河邊長流、僧契沖等があらはれ、次いで荷田春滿があらはれて、その門から賀茂真淵が出て、更に真淵の門から本居宣長が出て、更に國學の勢は天下を席卷し、後、平田篤胤がその學說を祖述して、我が國の古道は殆ど殘る限なく闡明され、國民的自覺心を大いに強めたのであつた。



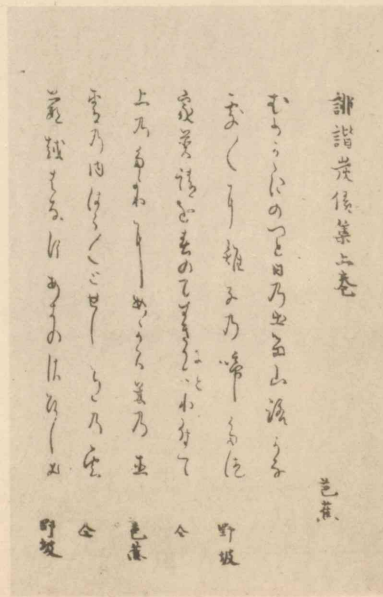
(藏庫文洋東) 戰合爺性國



(藏庫文洋東) 藏代永本日



(藏館書圖學大田稻早) 傳犬八見里總南



(藏庫文字松) 集俵炭諧誦

時代の特色と
文學の傾向

明治維新は文字通り我が國未曾有の大變革であつた。王政は古へに復り、封建制度は根柢から崩壊し、海外の文化は潮の如くこの島帝國に流れこみ、過去の文化が破壊されると共に、新しい文化が續々と建設され、文學も全く面目を一新した。即ち舊幕時代の嚴しい階級制が廢されて、四民平等となつた結果は、あらゆる方面から多數の作家を出すこととなり、印刷術の急激な進歩は、學問の普及と相俟つて、讀者の範圍を無限に廣め、文運をいやが上に振興せしめたのである。また、絶えず外國文學に刺激され、その影響を受けるところから、文學の内容も著しく深化し、その

一 概 觀

第六章 明治・大正時代

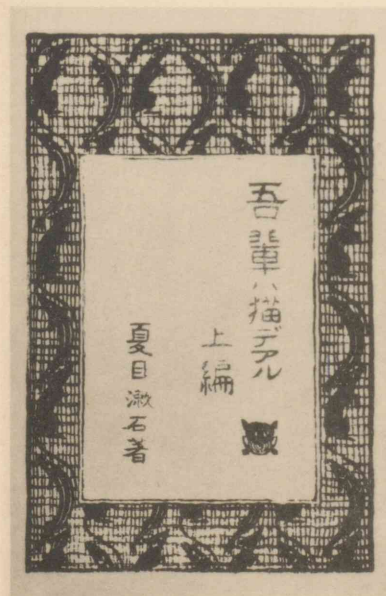
一 概 觀



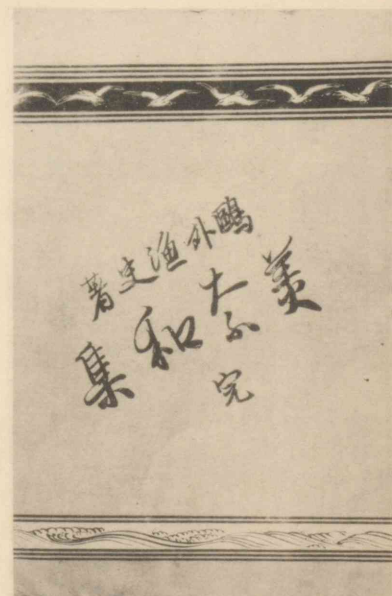
若菜集



當世書生集



吾輩ハ猫ヲル



美和集

形式も多趣多様となつた一方、思潮の上においても、外國と歩調を合はせて、殆ど彼我の區別のないまでになつたが、もとより國民性の相違は儼として存在してゐるのであるから、外來の思潮もおのづから日本化されて來たことはいふまでもない。

なほ、明治時代以後は、自由明快な言文一致體即ち口語體の文章が小説・評論等に用ひられ、後には詩歌の如き韻文までも殆どこの體によることとなつた。かくの如く口語體が盛んに用ひられるやうになると共に、寫實的精神と個性色を發揮する精神とが、文學のすべての分野にあらはれたが、この二つの精神こそ、明治時代以後における文學の最も注意すべき特色であるといはなければならぬ。

二 小説

混沌時代の文學

魯文の代表作は「西洋道中膝栗毛」である。藤栗毛は「東海散士」に「經國美談」の「任人之奇遇」の中、「花間鶯」の作があり、鐵鷲は「紫雲」の作があり、鳴鶴は「紫雲」の作があり、思談は「紫雲」の作があり、が「紫雲」の作がある。

新文學の發生

「書生氣質」も十八年に出た。

明治時代も、維新の大業が成つた當座は、専ら物質文化の建設に忙しく、精神文化の方は殆ど顧みられなかつたので、文學も何等新しい進展をなさなかつた。まさに明治文學の混沌時代といふべく、纔かに京傳・馬琴・一久・三馬等の如き江戸時代の戯作者の餘唾を嘗めた假名垣魯文等の滑稽小説と、當時の一般的風潮によつて政治熱に浮かされ、自己の理想を小説に託して表現した矢野龍溪・東海散士・末廣鐵鷲等の政治小説、乃至藤田鳴鶴等の翻譯政治小説が出でたばかりで、後者には些か新時代の文學らしい色彩があつたものの、それも文學として決して高く評價することの出來ないものであつた。

然るにこの混沌たる文界にあつて、坪内逍遙は明治十八年に「小説神髓」を著し、眞の文學の意義、創作の法則等を明らかにすると共に、その所論をみづから具體化した「當世書生氣質」を書いた。

「浮雲」は二十
年に出たが、
これには言文一
致體を用ひた
ものであつた

が、更に二葉亭四迷ふたはてしよめいがこれを具體化した。浮雲うきぐもを出すに及んで、近代的な寫實小説の基礎が始めて確立された。特に浮雲は清新な言文一致體の文章で書かれてをり、心理描寫は精緻を極め、景情は眼前に躍動し、後に出た自然主義文學と一脈相通するものがあつて、前代の戲作者の手に成る小説が勸善懲惡の方便となつてゐるのは、その根本において大きな相違があつた。

文三ぶんざうは父親の存生中より、家計の困難に心づかぬではないが、何といつてもまだ幼少のこと、いつまでもそれでゐられるやうな心地がされて、親思ひの心から、今に坊があゝして、かうして。と、年齢にはませたことをいひだしては、兩親に袂を絞らせたことはあつても、またどこともなくたわいなところもあつて、波に漂ふ浮草のうか／＼として月日を重ねたが、父の死後頼りのない母親の辛苦心勞を見るにつけ聞くにつけ、子供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の鹽が身

にしみて、夢の覺めたやうな心地。これからは給仕なりともして、母親の手足にはならずとも、せめて我が口だけと思ふ由をも母に告げて、相談をしてゐると、捨てる神あれば助くる神ありで、文三だけは東京にゐる叔父の許へ引取られることになり、泣きの涙で静岡を發足して、叔父を頼つて上京したは明治十一年、文三が十五になつた春のこととか。

(浮雲第二回)

硯友社

しかし、浮雲は、當時の文壇の程度や一般の風潮などに比して、あまりに進み過ぎてゐた。今まで戲作風の小説にのみ接してゐた讀書社會には、この心理描寫が主となつてゐる近代的な小説が、甚だ飽足らないものに感ぜられたらしい。そして、これがために、ほゞ同時代に起つた、戲作的傾向を多分にもつ硯友社一派の文學が、文壇に勢力を張ることとなつたのである。硯友社は、尾崎紅葉、山田美妙、齋藤石橋、思案丸岡九華等によつて明治十八年に結

小波は二十
丸に書か
九から一
十作家は
し作はに
轉御いて

「伽羅枕」は二
十三年「多
多恨」は十
九年「金
又「後」は
書死に「ま
未完のまよ
された

成され、初め機關雜誌として、我樂多文庫を出してゐたが、後、巖谷小波・川上眉山・江見水蔭・大橋乙羽・廣津柳浪等が馳加はり、更に紅葉の門下から泉鏡花・小栗風葉等が出でるに及び、その勢力は文壇を風靡するに至つた。硯友社一派の文學は、要するに、江戸つ兒風の通人ぶりを發揮したもので、藝術を遊戲視し、人生の批判などは全く没却して、ひたすら文章上の工夫にのみ熱中し、これを樂しんだのであつた。故に、眞面目に人生を考察し批判した二葉亭の文學を「人生のための藝術」といへば、硯友社一派の文學は「藝術のための藝術」といへよう。そして、この一派の中心となつたものは、いふまでもなく尾崎紅葉であつて、「伽羅枕」等初期の作は、艶麗芳醇にして輕妙な西鶴張の文章によつて、多く女性の情緒を浪漫的に寫したものであるが、その後期の作「多情多恨」「金色夜叉」等になると、さすがに寫實的傾向が濃厚になつてゐる。なほ、山田

「武藏野」は小
説集「夏木立」
に收められて
二十一年に出
でたが、後二
十三年「美
友社」の退後
十一年「胡蝶
が第一の傑
作である。二
作には二言
と共には二
致と共には
創始者であ
た

美妙齋の材を歴史に取つた抒情味の豊かな作「武藏野」もまた、硯友社の文學のうち代表的なものであるが、彼はその後、同社を去つて、「雜誌」都の花に據つた。

まことによくこそ我は來つれ！胡ぞ來るの甚だ遅かりし。山の麗しといふも、壤の堆きもののみ、川の暢しといふも、水の逝くに過ぎざるを、牢として抜くべからざる我が半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべきものならんと、齒牙にも掛けず侮りたりし己れこそ、まづ侮らるべき愚かのものならずや。看よく、木々の緑も、浮かべる雲も、秀づる峰も、流るゝ溪も、峙つ巖も、吹來る風も、日の光も、鶏の鳴く音も、空の色も、皆おのづから浮世のものならで、我はここに憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心は水と淡く、希はくは今よりかくの如くして我が生を了らんかな。

(金色夜叉第三十三章)

明治二十年代の文壇は、硯友社一派の文學によつて占められてゐたとはいつても、もとより同派以外に立つものが全然な

露伴と一葉

「風流佛」は二
塔二年五重
藏年一は二十
年に出た。六
「たけくらべ」
「にぎりえ」は
「十三夜」は
づれも二十八
年に出た。

つたのではない。特に幸田露伴の如きは、紅葉と對角線の上に立ち、紅葉と並び稱されたのであつた。露伴も西鶴に私淑し、その筆意を學んだことは紅葉と同じであるが、作の中心生命に至つては、根本的に相反してゐる。即ち紅葉が浪漫的とはいつても、大體において寫實を基礎としてゐるのと反對に、露伴は全く空想から出發し、紅葉は主として殉情的な女性を描いてゐるが、露伴は飽くまで豪快な意氣を有する男性を寫し、文章においてもまた、前者が艶麗であるのに對して、後者は雄勁を極め、莊重嚴肅な氣分が漲つてゐる。そして、露伴の代表的な作は「風流佛」「五重塔」「風流微塵藏」等であらう。また當時、天才的女流作家として輝かしい光芒を放つたのは樋口一葉で、やはり西鶴張の生彩ある筆致により、いひ知れぬ深い哀愁を湛へた「たけくらべ」「にぎりえ」「十三夜」等の傑作を、その短い生涯の間にいくつか文壇に投じた。

翻譯小説

特に森鷗外の翻譯及び創作集「美奈和集」(二十四年)は文壇に強い刺激を與へた。

觀念小説と深刻小説

「うらおもて」「夜行巡查」は「外科室」は「づれも」は「鏡花」は「高野聖」は「十三夜」は「きんぎょ」は「やうになつた」

翻譯小説は、明治文壇の混沌時代に夙くも出でたことは、前述の通りであるが、新文學の發生後は、大いに進んで、二葉亭はロシヤ文學を、森鷗外はドイツ文學を、森田思軒は英佛文學をそれぞれ翻譯して、我が文壇に刺激を與へ、新人の崛起を促した。硯友社の文學の流を汲む川上眉山、泉鏡花等は、その後、小説によつて、人生に對する或觀念を具體化し、これを讀者の頭腦に浸潤せしめようとする試みを創めたが、かくの如き小説を世に觀念小説と呼んでゐる。たとへば、個人的の罪惡も、その根本を探れば、畢竟社會が然らしめたのであつて、罪は個人になく、むしろ社會にあると説く如きで、眉山の「うらおもて」、鏡花の「夜行巡查」「外科室」等は、その代表作といつてよい。そして、この觀念小説のもつ悲惨味を一層深刻にしたものが、廣津柳浪の深刻小説であるが、しかし深刻小説は、たゞに悲惨味が多いばかりでなく、觀念小説に

「變目傳」は「黒
蜥蜴」は「いづ
れも二十八年
に出た。

家庭小説

比すれば、遙かに寫實性に富み、心理描寫の精細なことは、當時、他に類のないものであつた。中でもその特色のよくあらはれてゐる作は「變目傳」「黒蜥蜴」等である。

さて、日清戦役も終つて、三十年代に入ると、文學と一般社會とが接近しようとする傾向が急に著しくなつて來たが、この風潮に應じてあらはれたのが、いはゆる家庭小説で、徳富蘆花の「不如歸」「思ひ出の記」「黒潮」「菊池幽芳の己が罪」等が三十一二年頃から續々とあらはれ、いづれも洛陽の紙價を高めた。就中、「不如歸」は、日清戦役を背景として、或上流家庭の悲劇を描き、最も世に歡迎されたものである。

學 自然主義の文

けれども、これ等の家庭小説は、家庭道德を感傷的に強調するにとどまつて、文壇に對しては、何等新しい寄與をなさなかつたが、三十三年に出た小杉天外の「はつ姿」は、自然主義的寫實性を

「破戒」は三十
九年、「蒲團」
は四十年、「生」
は四十二年、
で四十二年に出

もつ最初の作として注目に値する。即ち天外はフランスのエミール・ゾラの説に則つて、あるがまゝの人生の相を、少しも作者の私意を加へずに再現すべきことを提唱し、自然主義文學に先鞭をつけたのであつて、「浮雲」に發した我が寫實主義の文學は、ここに始めてその本道を見出だしたわけであつた。しかし、天外の作には、なほ世俗的・道德的な分子が抜けきつてゐなかつたが、日露戦役を契機として文壇は大きな飛躍を遂げ、鳥崎藤村の「破戒」、田山花袋の「蒲團」「兵卒」「生」等が出て、自然主義文學の全盛時代を現出するに至つた。尤も、國木田獨歩の如きは、夙く三十四五年の交に「牛肉」と「馬鈴薯」「酒中日記」「運命論者」等、自然主義的な觀照をほし、いまゝにした作を書いたが、これ等は當時にあつては默殺されてしまつた形で、その眞價が認められるやうになつたのは、やはり「破戒」「蒲團」等が出てから後のことであつた。

そして、かくの如く自然主義が隆盛となつたのは、日露戦役に空前の大勝を博して後、外國との關係が俄に密接となり、當時、歐洲の思想界を風靡してゐた、自然科学を背景とする唯物的思想と、個人主義的・本能主義的な思想とが滔々として我が國に流れこんだ結果で、あたかも戦勝によつて、永い間の繫縛から解放された自由をその身に感じてゐた人々が、かゝる思想の渦の中に捲きこまれて行つたのは、當然の事といふべきであらう。かくして、自然主義は、單に文學界のみならず、社會の各方面に非常な影響を及ぼしたが、この派の作家たちは、いかなる人生の瑣事と雖も、これを如實に再現するならば、それによつておのづから人生の意義を髣髴せしめることが出来るといふ信條の下に、自己の體驗の赤裸々な暴露をも敢へてし、ひたすら人生の眞を描かうと努めたのであつた。前に挙げた外に、この派の作家としては、な

秋聲はもと紅葉の門下であつたが、後、自然主義に轉向したのであ

餘裕派と耽美派

この當時、森鷗外もまた自然主義の外に、立つて、多くの歴史小説を書いた。

ほ、徳田秋聲・正宗白鳥・岩野泡鳴等が挙げられる。

生活はやつぱり苦しかつた。月に二十圓の収入を得るのが困難であつた。全力を挙げた長篇小説は全然失敗して、二百枚ばかり書いて破つて捨ててしまつた。翻譯の安仕事、空想ででつち上げた紀行文、そんなものを賣つて纔かに生活を續けた。それに、漸く名を出し始めた身に、雨霰と注ぎかけられる罵評、それが何よりも辛く痛かつた。(生)

自然主義はかくの如く文壇を席卷したのであるが、この時代においてもまた、これと全然傾向を異にした作を出して、別箇の讀書社會から大いに迎へられてゐた作家があつた。即ち夏目漱石や永井荷風、谷崎潤一郎等がそれである。漱石は三十八年に「吾輩ハ猫デアル」を書いて以來、自然主義の文學が、あまりに重苦しい現實に執し過ぎ、あまりに餘裕がなさ過ぎるのに對し、みづから則天去私の境地に住して、餘裕のある文學を續々と發表し、現

實から一步も出でることのない自然主義の文學に冷笑を送つた。彼のさういふ境地を最も鮮かに示してゐるのは「草枕」であるが、「坊つちやん」「虞美人草」にしても、「門」「明暗」等にしても、皆どこかに餘裕があり、そして、そこに一縷の光明を見ることが出来る。また、永井荷風は初は自然主義的な作風を持してゐたが、四十二三年の頃から専ら、耽美的・享樂的な色彩の濃厚な作を出すやうになり、「歡樂」「冷笑」等によつてその特色を發揮し、谷崎潤一郎もまた同じ頃、「刺青」の一篇を發表して、耽美派の名を得、爾來病的な官能の美を生々しく描寫した「少年」「惡魔」等、多くの作を出した。

夕暮の机に向かふ。障子も襖もあけ放つ。宿の人は多くもあらぬ上に、家は割合に廣い。余が住む部屋は、多くもあらぬ人の、人らしくふるまふ境を、幾曲りの廊下に隔てたれば、物の音さへ思索の煩にはならぬ。今日は一入靜かである。主人も、娘も、下女も、下男も、知らぬ間に我を殘

「坊つちやん」は三十年
「草枕」は三十九年
「虞美人草」は四十一年
「門」は四十三年
「明暗」は四十二年
大正五年に出た作者の死によつて未完のまま残された。

「歡樂」「冷笑」は四十二年
「刺青」は四十三年
「少年」「惡魔」は四十四年
「少年」は四十五年に出た。

なほ四十三年に漱石の紹介によつて發表された小説「長塚節」は先づ農の文學の先

して、立退いたかと思はれる。立退いたとすれば、たゞの所へ立退きはせぬ霞の國か、雲の國かであらう。或は雲と水が自然に近づいて、船をとるさへ懶き海の上を、いつ流れたとも心づかぬ間に、白い帆が雲とも水とも見分け難き境に漂ひ來て、はては帆みづからが、いづこに己れを雲と水より差別すべきかを苦しむあたりへ——そんな遙かな所へ立退いたと思はれる。それでなければ、卒然と春の中に消え失せて、これまでの四大が、今頃は目に見えぬ靈氣となつて、廣い天地の間に、顯微鏡の力を藉るとも、些の名残をとゞめぬやうになつたのであらう。或は雲雀に化して、菜の花の黄を鳴き盡くしたる後、夕暮深き紫のたなびくほとりへ行つたかも知れぬ。または永き日をかつ長くする蛇のつとめを果したる後、盡に凝る甘き露を吸損ねて、落椿の下に伏せられながら、世を香ばしく眠つてゐるかも知れぬ。とにかく靜かなものだ。

(草枕)

餘裕派や耽美派の文學が、一部の讀書社會に迎へられてゐた

白樺派

「鼻」は五年、
「枯野抄」は忠
直卿行狀記、
「解」は六年、和
「暗夜行路」は
十年に出た。

「内供」は内供
奉僧の略で、
即ち内道場
(宮中で佛事
を修する所)
に供奉した僧
をいふ。
「沙彌」は剃髮
受戒したばかり
の僧をいふ。

里見弴等が、主なものであつた。實に大正時代の中期以後は、これ等の作家の目覺しく活躍した時代で、作もおびたゞしい數に上つたが、就中、芥川龍之介の「鼻」、枯野抄、菊池寛の「忠直卿行狀記」、佐藤春夫の「田園の憂鬱」、志賀直哉の「和解」、暗夜行路等は、傑作の名が高かつた。

禪智内供の鼻といへば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて、上唇の上から頤の下までさがつてゐる。形は元も先も同じやうに太い。いはば、細長い腸詰のやうなものが、ぶらりと顔の真中からぶらさがつてゐるのである。五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは専念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を氣にしてゐるといふことを、人に知られるのが嫌だつたから

である。内供は日常の談話の中に、鼻といふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。内供が鼻を持ってあました理由は二つある。一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一、飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鏡の中の飯へとゞいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向ふへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸、長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐてもらふことにした。しかしかうして飯を食ふといふことは、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易なことではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚏をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ主な理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

世界大戰役後、歐洲においては、社會制度の改造が強調される

(鼻)

やうになり、これが無産階級の自覺を促したが、彼等はその思想の表現を文學に求めて、いはゆる無産階級の文學を生んだ。そして、この思想が我が國に流れこむと、我が國にもまた、無産階級の文學があらはれ、一時は相當盛んであつたけれども、それは、もとより文壇の傍流的存在に過ぎなかつた。

三 戯曲

明治文學の混沌時代においては、戯曲もいまだ新しい進展を見せず、江戸時代の傳統を逐うた古河默阿彌の歌舞伎劇等が一般に行はれてゐたのであるが、この間にあつて、九代目市川團十郎は、夙く明治七年頃から、荒唐無稽な歌舞伎劇を排し、古典的考證を根據にして、史實そのまゝを舞臺に活現しようとする試みを始めた。活歴と呼ばれるものが即ちこれであつて、當時の學者

活歴と史劇

活歴の名は、假名垣魯文が明治十一年につけたので、歴史の意に外ならない。

學海野拾遺作、名吉の二十一年、年櫻癡の二十一年、局作は二十一年、年櫻癡の二十一年、なほ櫻癡の流、に岡本綺堂がある。桐一葉は二十九年、杵手は孤城落月、三十年代に出た。

翻譯劇と新派劇

樂劇と近代劇

高官等の支持を受け、世に大に行はれた。そして、この活歴に刺激されて、寫實的な史劇を書き始めたのが依田學海、福地櫻癡等であるが、次いで二十六年に坪内逍遙が、史劇は要するに歴史的事實を藉りて、人生の真相を表現すべきものであることを高唱し、桐一葉、杵手、鳥孤城落月等によつて、これを實際的に示すに至つて、始めて戯曲の革新がその緒に就いた。

また、逍遙は既に十六年の頃にシェイクスピアの「ジュリアスシーザー」を譯した。自由太刀餘波銳鋒を出してゐるが、森鷗外も二十年代になつて、レツシングの「エミリアガロテイ」を譯した。折薔薇をはじめ、歐洲の戯曲を多く翻譯して、劇界を刺激することに努め、三十年代に入ると、不如歸や金色夜叉等の、いはゆる新派劇と共に、翻譯劇は頻々と上演されたのであつた。國劇刷新の必要を唱へて、樂劇を主唱したのも、やはり逍遙で、

文藝協会は正二年に解散した。島村抱月等は別に藝術座を組織した。近代劇は近世の事相を扱ふ。社会劇ともいふ。

その後の戯曲

築地小劇場は正十三年に出来た。

彼は三十七年に「新曲浦島」を、三十八年には「新曲赫映姫」を公にしたが、三十九年に至つては、その實際運動として文藝協會を組織した。しかも、一方においては、島村抱月・中村吉藏等がイブセン等の近代劇の翻譯に従ひ、また小山内薫等は市川左團次と提携して自由劇場を起し、近代劇の上演を試みるなど、自然主義運動は劇界にも及んでその勢はなかく盛んであつた。

近代劇が我が國に移植されて後、戯曲界は急に活氣を呈して來て、眞山青果・長田秀雄・菊池寛・山本有三等、俊秀な作家が競つて戯曲の創作に従事し、その分野も、映畫劇・兒童劇・舞踊・ページェント・ラヂオドラマにまで擴るに至つた。なほ、新劇團體では、小山内薫等の築地小劇場が、最も劇界に盡くすところが多かつた。

四 短歌と俳句

淺香社

竹柏會は後、竹柏會の淺關雜誌となつた。心の花は三十一年に出版された。

明治時代の新しい短歌は、まづ落合直文の短歌革新から始まる。その以前は、香川景樹の桂園派の流を汲む高崎正風・税所敦子等の堂上派の歌人が歌壇を代表してゐたのであるが、直文は二十六年に淺香社を組織し、その門下の與謝野鐵幹・鹽井雨江・久保猪之吉・服部躬治・金子薫園・尾上柴舟等を指導して、短歌の革新に當らしめ、明治の歌壇に始めて清新な調をもたらした。

霜やけのちひさき手して蜜柑むく我が子しのばゆ風の寒さに

(落合直文)

落合直文よりやゝおくれて、新舊兩派の歌を折衷して獨得の歌風を創めたのは、佐佐木信綱であつた。そして、信綱の主宰した竹柏會からは大塚楠緒・川田順・石樽千亦・木下利玄等が出た。幼きはをさなきどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ

(佐佐木信綱)

根岸短歌會

正岡子規は二十年代には専ら俳句の革新に當つてゐたが、三十年代に入つては歌界の革新にも當り、眞摯質樸な萬葉調を推稱し、その門下である香取秀眞、岡麓等によつて、三十一年に子規を中心とする根岸短歌會が創立された。なほ、子規の短歌方面の門下には、伊藤左千夫、蕨眞、長塚節等がゐた。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ壘の上にとゞかざりけり

(正岡子規)

新詩社

窪田空穂も初
窪田空穂も初
窪田空穂も初
窪田空穂も初
窪田空穂も初

落合直文の淺香社から出た與謝野鐵幹は、みづから男性の歌と稱する豪健な歌を詠んで、歌界革新の急先鋒となつてゐたが、三十三年には、その主宰する新詩社から機關雜誌「明星」を出し、その妻晶子もまた傳統を破つた情熱的な歌風をもつて、歌壇の驚異の的となつた。新詩社の同人としては、高村光太郎、平野萬里、吉井勇、北原白秋、茅野蕭々、茅野雅子、山川登美子、石川啄木等があ

啄木の歌は
啄木の歌は
啄木の歌は
啄木の歌は
啄木の歌は

つたが、このうち啄木は後に、金子薫園の門から出た土岐哀果と共に、切實な生活苦を詠じて、特色ある歌風をなした。

野に生ふる草にもものをいはずばや涙もあらん歌もあるらん

(與謝野鐵幹)

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

(與謝野晶子)

尾上柴舟の一
尾上柴舟の一
尾上柴舟の一
尾上柴舟の一
尾上柴舟の一

同じく淺香社から出た尾上柴舟は、一時、久保猪之吉、服部躬治等と、いかづち會を組織してゐたこともあつたが、新詩社の全盛時代になつても作歌を廢せず、圓熟した穩健な歌風を持して、独自の道を進み、その門からは、若山牧水、前田夕暮等を出した。

(尾上柴舟)

根岸短歌會は、子規の歿後、始めて機關雜誌「馬酔木」を出し、次い

アララギ派

「馬酔木」は三十六年「アカネ」は四十一年に出た。

で「アカネ」を出したが、新詩社の勢力に壓せられて、歌壇からは全く黙殺されてゐた。然るに四十一年、蕨眞の手により「アカネ」とは別箇に「アラギ」が出され、伊藤左千夫を中心として、齋藤茂吉、古泉千樞等が目覺しく活躍するやうになつて、その歌風が漸く世人から注目され、左千夫は大正二年に歿したが、その後は島木赤彦が中心となつて、活動を續けたので、「アラギ」派の勢力は年々に増大し、遂にその歌風が天下を風靡するに至つた。この派の歌人としては、以上擧げた外に、中村憲吉、土屋文明、今井邦子等がある。

ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そゝぎ榮ゆるみどり庭に足らへり

(伊藤左千夫)

ある日わが庭のくるみに囀りし小雀來らず互えかへりつゝ

(島木赤彦)

口語歌と無産派の短歌

日本派とホトギス派

夏目漱石も子規の友人として俳句を作つてゐた。

なほこの外に、西村陽吉、矢代東村等の主唱する口語歌、及び無産派の人々の階級意識を強調した短歌があるが、いづれもいまだ渾然たる藝術の域に到達してゐない。次に明治時代の俳句は、正岡子規の革新運動から始まる。その以前は、歌界が堂上歌人によつて支配されてゐた如く、俳句界もまた、江戸時代の傳統に立つ宗匠たちによつて支配され、いはゆる月並な句が横行してゐたのであるが、子規は二十五年の交、新聞「日本」の紙上に矢つぎ早に俳話・俳論を發表し、月並調の打破に努める一方、蕪村の客觀的・繪畫的な傾向を推稱し、俳句の上に寫生道を樹立した。かくして、子規の許には、内藤鳴雪、高濱虚子、河東碧梧桐等、日本派の名をもつて呼ばれる多くの同志が集つたが、三十年に伊豫の松山において、柳原極堂の創刊した俳誌「ホトギス」が、三十一年に東京に移され、虚子の手によつて續刊され

るやうになつてからは、俳句界は殆ど子規に統一されたといつても過言ではない。それから數年ならずして子規は歿したけれども、その後も「ホトトギス」は虚子によつて守り続けられ、村上鬼城・飯田蛇笏・原石鼎等、多くのすぐれた俳人を出した。「ホトトギス」に據つたこれ等の俳人を世にホトトギス派の俳人といつてゐる。

春雨や傘さして見る繪草紙屋

子規

雷鳴るや松明らかに濱廂

虚子

日本派が漸く盛運に向かはうとする時に當り、二十七年には、大野酒竹・佐々醒雪・笹川臨風・沼波瓊音等によつて筑波會が組織され、二十八年には、角田竹冷・尾崎紅葉・岡野知十・巖谷小波等によつて秋聲會が組織された。このうち前者は、新派俳句勃興の機運に促されて起つたものであるが、後者は單に日本派に對抗して

筑波會と秋聲會

松字は日本派に合流する前に雑誌「俳諧」(二十六年創刊)を出してゐた。「秋の聲」は二十九年、一卯年に出でた。

起つたといふに過ぎず、後には、一時、日本派と合流してゐた伊藤松字や、筑波會の大野酒竹等も馳せ加はり、別に統一された主義主張といふものはもたなかつた。秋聲會の機關雜誌には、初め「秋の聲」後に「卯杖」がある。

立秋の大鐘つくや瘦法師

酒竹

下谷一番伊達の薄着の夜寒かな

醒雪

松遠み夕日春く沖胸

竹冷

草市の一夜露けき都かな

松字

新傾向句

前にも述べた如く、虚子は、とにかく子規の繼承者として、「ホトトギス」を守り續けて今日に至つてゐるのに對し、河東碧梧桐は、明治の末期になつて、いはゆる新傾向句を提唱し、十七字詩形季題といふ俳句の二大約束を破壊し、完全に「ホトトギス」と絶縁した。また、萩原井泉水も同じ頃、「俳誌層雲」を出して、新傾向句を提唱

し、その後多くの同志を得るに至つた。

雄鷄闘ふとさかの榮えを黍の下葉に

碧梧桐

更けて鐘にひた寄る月ありけり

井泉水

五 詩

新體詩の發生

明治時代の新體詩は、十五年に『新體詩抄』が出て、その口火が切られた。『新體詩抄』は外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の合著で、テニス・ロングフェロー等の譯詩も收められてゐるが、また自作の詩もあり、形式はすべて七五調をなしてゐる。しかし、それは形式に新味はあつたが、想の表現の上では、いまだ粗笨を免れなかつた。

グレイの「挽歌」の一節

山々かすみいりあひの

鐘はなりつゝ、野の牛は

徐に歩み歸りゆく

耕す人もうちつかれ

やうやく去りて余ひとり

たそがれ時に残りけり

(新體詩抄)

新體詩の完成

當時、宮崎湖
處子・中西梅
花・大和田建
樹等も詩界に
多くの功績を
遺した。

「若菜集」は三
十年、「夏草」は三
十一年、「落梅集」は三
十四年に出た。

十九年に至つて、山田美妙齋は尾崎紅葉丸岡九華と共に『新體詞選』を編し、二十一年には落合直文が、井上哲次郎の漢詩を譯した。孝女白菊の歌を發表して、形式も次第に齊整され、想もまた洗煉されて來た。次いで二十二年に森鷗外等の譯詩『於母影』が出てると、新體詩の内容は大いに進展を見たが、二十六年から北村透谷が雑誌『文學界』に據つて、人生のための藝術を力強く主張し、情熱の溢れる如き詩を作り、透谷の歿後、その遺業を繼いで島崎藤村が詩壇に立つに及んで、始めて新體詩は内容・形式共に完成された。藤村には『若菜集』『二葉舟』『夏草』『落梅集』等の詩集があり、そのいづれにも、青春の若々しい感情が漲り、優美な聲調に富んでゐる。また、藤村と同じ時代に詩壇に活躍した詩人に土井晚翠がある。晚翠は藤村が抒情詩人であるのに對し、敘事詩人としての傾向

「天地有情」は三十二年、曉鐘は三十四年に出版した。

「小諸なる古城のほとり」の一節

が著しく、「天地有情」「曉鐘」等の詩集に見えるその詩の格調は、雄渾を極めてゐる。この藤村・晚翠の外にも、鹽井・雨江・武島・羽衣・大町・桂月・與謝野・鐵幹等の諸詩人が、同じ時代にあらはれた。

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ

緑なす蘘萐は萌えず

若草も藉くによしなし

しろがねの衾の岡邊

日に溶けて淡雪流る

(落梅集)

象徴詩

「暮笛集」は三十二年、春は三十四年、「白羊宮」は三十九年、「草わかば」は三十五年、「春鳥集」は三十八年に出版した。

藤村・晚翠の後を承けて詩壇に並び立つたのは、薄田・泣菫と蒲原有明とである。泣菫は複雑な情緒の世界を歌つて、古典的な趣を見せたが、やゝおくれて詩壇に出た有明は、情緒の世界を一層深く掘下げて、幽玄微妙な象徴詩を、始めて我が詩壇にもたらしめた。そして、これより象徴詩が詩界の中心となつたのであつて、泣菫の詩も、その後期のものは、象徴詩風の分子が少くない。詩集には、泣菫に「暮笛集」「ゆく春」「白羊宮」等があり、有明に「草わかば」「春鳥

集」等がある。なほ、三十八年に出版した上田敏の譯詩集「海潮音」も、象徴詩の隆盛を致すに與つて力が多かつた。

「家根の草」の一節

家根の草ひでりに乾き

項垂れもだし萎えて

焼けさかる薨の波に

つゆもなき葉をしゆるがす

家根の草かくて乾くか

夏はこれなかばのみやこ

かの瓦照りてたはぶれ

この薨燃えてほゝゑむ

(春鳥集)

自由詩

しかし、時勢の推移すると共に、やがてこの隆盛を極めた定型詩も衰退し、詩界に一期を劃する時が來た。即ち四十年に自由詩運動が起り、川路・柳虹が、河井・醉茗の主宰する雑誌「詩人」に始めて定型を破つた自由詩「塵溜」を發表して以來、相馬・御風・三木・露風・北原・白秋等が相次いでこれを試み、遂に自由詩は詩界を風靡するに至つた。かくして、明治・大正の交には、柳澤・健・西條・八十・野口・米次

郎・佐藤惣之助・室生犀星・野口雨情等の諸詩人があらはれ、童謡から民謡の世界をも開拓して、優に國民詩形としての完成を見せたのである。

六 評 論

明治文化の混沌時代にあつて、歐米の實利主義の思想を唱道したのは、福澤諭吉であり、精神主義、理想主義の思想を唱道したのは、中村正直であつた。前者は明治以前に既に慶應義塾を開いた教育家で、その著には「西洋事情」學問のすゝめ等があり、後者もまた明治初年に同人社を設立して、英語を教授した教育界の先覺で、その譯著に「西國立志編」「自由之理」等がある。更に同時代の新聞界を見ると、「江湖新聞」の福地櫻癡、「朝野新聞」の成島柳北、「曙新聞」の末廣鐵腸等が、各論陣を張つて相對してゐた。

混沌時代の評論界

諭吉にはなほ「新體詩風」の「世界國畫」の著があつた。
「西國立志編」はスマイルス「自由之理」はミルの原著

二十年代の評論界

「國民之友」は二十二年、「國民新聞」は二十三年に出でた。「日本人」は二十一年、「日本」は二十二年に出でた。

自然主義時代の評論界

次いで二十年代に入つては、徳富蘇峰・竹越三又・山路愛山等が雑誌「國民之友」及び「國民新聞」に據つて、民衆的歐化主義を唱へたのに對し、三宅雪嶺・志賀矧川・井上圓了・福本日南・陸羯南等が雑誌「日本人」及び新聞「日本」に據つて、國粹保存主義を唱へるなど、評論界は活氣が漲つてゐた。また、文學評論は、十八年に出でた坪内逍遙の「小説神髓」を最初とすべきであらうが、二十年代には、逍遙が引續いて文學評論の筆を執つた外、森鷗外の「ドイツ近代の美學」を根據とする文學、美術論、大西操山・上田敏の「詩歌論」、正岡子規の「俳句論」、與謝野鐵幹の「短歌論」、北村透谷等の「文學界」、同人の理想主義的な人生論等が出て、この方面もなか／＼賑やかであつた。
日清戰役後、三十年代の劈頭に當つて、高山樗牛は日本主義を提唱したが、その後、彼はニイチエの説を祖述して、或は美的生活論を唱へ、或は本能満足主義を唱へて、自然主義文學の勃興を促

「歌よみに與ふ」は三十八年に出た。この時代には、また大町桂月が盛んに文學批評の筆を揮つた。

その後の評論界

した。やがて日露戦役が起り、戦後、自然主義は文學界を風靡するに至つたのであるが、この當時にあつて、混亂紛糾を極めてゐた自然主義に理論的體系を與へたのは、島村抱月、長谷川天溪、岩野泡鳴等であり、その傳播に努めたのは、片上天弦、相馬御風、中村星湖等であつた。しかし、その一面には、森鷗外、後藤宙外等の如く、自然主義を非難する立場に立つ者もあり、生田長江等の如く、折衷主義を持する者もあつた。なほ、三十年代の初期に正岡子規が「歌よみに與ふる書」を書いて、萬葉調を推稱したことと、後期に綱島梁川が「病間録」等を發表して、宗教的信念を説いたこととは、注目に値する。

その後、白樺派の擡頭から新現實主義の文學に至るまでの評論界に活躍した人々には、武者小路實篤、阿部次郎、和辻哲郎、吉江喬松、厨川白村、正宗白鳥等があつた。

第七章 現代

昭和時代即ち現代の文學は、あらゆる分野にわたつて、あらゆる新しい活動が試みられてをり、一概にいふことは出来ないが、小説界はほゞ純粹藝術派と無産派と大衆文學派とに分裂し、そのおの／＼がまた幾つかに小さく分裂してゐる。そして、このうち藝術的に最も高く評價されるべきは、いふまでもなく純粹藝術派の文學であつて、心理過程の機械的分析等が徹底的に試みられ、その描寫も著しく多角的となつてゐる。しかし、大がかりな規模と複雑な機構とに興味の中心を置いてゐる大衆文學は、時代物に、現代物に、諧謔小説に、それ／＼優秀な作家が輩出するに及んで、その勢力が殆ど全小説界を壓し、その藝術性においても、現在では純粹文學派の文學に肉薄するものが少からずあらは

大衆文學が盛んなつたのは、主として娛樂の樂を主とする大衆の嗜好の大きき原因をなしてゐる。

れるやうになつた。また、戯曲界・短歌界・俳句界・評論界の方面も、皆一様に進展の跡が著しく、最も傳統を重んずる短歌の如きも、現在では口語歌よりなほ一步進んで、その定型が破られ、生きくとした現實感を端的直截に短歌性の中に具象化しようとする運動さへ起つてゐる。要するに昭和の文學は、現在既に第一期の黎明期を終へて、次の飛躍に移らうとしてゐる状態に置かれてゐるといつてよいであらう。

國文學史 終

野本製

昭和八年六月十八日印刷
昭和八年六月二十二日發行

昭和八年十一月八日訂正再版印刷
昭和八年十一月十一日訂正再版發行

國文學史 奥附
定價金 六拾錢

著者 高木武

發行者 東京市神田區通神保町三番地
富山房

代表者 坂本嘉治馬

印刷者 東京市芝區芝浦町三丁目二番地
川口芳太郎



發行所

東京市神田區通神保町三番地
富山房

電話神田二、一七一—二、一七八番
振替口座東京五〇一八番

